研究ノート

近世近代の奈良に関する案内記類にみる鹿

水　谷　知　生・平　侑　子

1　はじめに

現在，奈良公園周辺に生息するニホンジカは，奈良観光の興味対象として重要な位置を占めている。奈良の鹿と奈良の来訪者との関係については，幡鎌(2010)は，「それ(鹿)を信仰の対象とみるか，可愛くまた雄々しい動物とみるかは，強制の有無を別とすれば，さしあたり見る人の心性次第」とし，1465（寛正6）年に奈良を訪れ南都八景の一つとして「春日埜鹿」を書き留めた李瓊真藥は，奈良の住民ではなくゲストであるがゆえに鹿を景物の一つとして語り，南都八景はその後人々に定着していく。また，1683(天和3）年の『千種日記』での記述では鹿にそれほど畏怖を感じていないことから，17世紀後半，奈良を訪れる人にとって，鹿は間違いなく景物であったとし，この時期までに，奈良の鹿は訪問者にとって畏怖の対象ではなく，見るべき対象となっていることを示している。しかし，この段階では，近現代の餌を介して鹿と人とが接触する関係性は成立していない。

水谷・平(2018)，平・水谷(2018)では，近世に奈良を訪れた者の紀行文から，1700年代までの紀行文ではシカは風景として描かれるが来訪者との関係，餌やりについては記されていない一方，1800年代の紀行文では，人に馴れている，食べもの(菓子，くだもの)を求める，人のたもとや裾にまとわりつく，餌売りがいる，食を投げ与える，犬猫のよう，などシカと来訪者の関係が記されていることを明らかにした。また，近世の奈良を訪れた者による道中日記の分析により，鹿が人馴れし，食べ物を与える状況，食べ物を売る状況についての記述は1800年代に入ると多くなることから，1700年代

の終わり頃，奈良の来訪者に対し，シカに与える餌を売り，来訪者がそれを買うことが生じ，1800年頃には人によく馴れている状況が成立したことを明らかにした。

南都八景の一つ「春日埜鹿」として風景の一部として訪問者によって認識されていた奈良の鹿が近世後期以降，訪問者によく馴れ，餌を介した関係が成立していたことは，紀行文や道中日記といった奈良の外部の者の記述によって明らかになるが，奈良を紹介する案内記類では，どのように記されていたのだろうか。鹿という存在を来訪者にどのように伝えようとしていたのだろうか。

本稿では，来訪者に対し奈良を紹介する近世近代の案内記類での鹿の記述内容を広く収集し，奈良の鹿と来訪者の人に馴れて餌やりをする関係や鹿寄せや角切りといった活動がどのように紹介され，その紹介内容はどのように変化していったのかを明らかにする。

2　近世の奈良の案内記類の発行

近世の奈良について記された案内記類のうち，来訪者に情報を提供するメディアとしては板木に彫ってある程度の量が刊行された（板行された）ものをあげることができる。奈良に関する地誌，案内記類については，これまで，平井の一連の検討（平井（1964）（1966）（1968）（1969）），『奈良市史通史三』（奈良市史編集審議会編（1988）），山近（1995）の検討があり，これらを元にして，江戸期の奈良に関する案内記類を表1に整理した。

表1　江戸期の奈良に関する案内記類

（※板行ではないもの）

		表　　題	発　刊　者	備　　考
万治2	1659	南北二京霊地集※	村上勘兵衛（京都）	京都・奈良等の寺社仏閣紹介
寛文6	1666	和州寺社記※		上下二冊，大和の詳細な寺社記
寛文7	1667	京童跡追　第三		大和の名所案内
延宝3	1675	南都名所集		十巻，大和の名所案内

延宝6	1678	奈良名所八重桜	柏屋仁右衛門（江戸）	奈良町の名所案内・菱川師宣画
延宝6	1678	大和国中独案内		京都出発の大和の名所案内，小型本
延宝9	1681	和州旧蹟幽考		大和の社寺旧跡紹介
貞享元	1684	南都名所道筋記	（奈良）	奈良町の名所案内
貞享4	1687	奈良曝	洛南書房西村嘯月堂（京都）	奈良町の各町に関する地誌
元禄5？	1692？	大和名所記		大和の名所案内
元禄8？	1695？	大和名所記		大和の名所案内，元禄5とは別版
元禄9	1696	大和名所鑑		全国の名所案内・菱川師宣画
元禄15？	1702？	南都名所記		奈良町の名所案内　確認されている版について白石（2005）は元禄期の刷とはみていない
宝永5	1708	御手の糸※		奈良町の案内
宝永／正徳頃	1710頃	大和名所独旅	いとや市兵衛（大阪）	大和の名所案内，小型本
正徳3	1713	新版奈良名所案内	菊屋七良兵衛（京都）	奈良曝の板木を流用
享保10?	1725？	大和廻記	いとや市兵衛（大阪）	京都出発の大和の名所案内，小型本
享保11	1726	南都賦	瀬尾奎文館（京都）	大和の寺社等を紹介，漢文体
享保11	1726	大和志		大和の地誌，寛文体
享保20	1735	奈良坊目拙解※		奈良町の各町に関する地誌
延享4？	1747？	大和名所記	山村重三郎（奈良）	元禄8改版
宝暦4	1754	改正絵入南都名所記	絵図屋庄八（奈良）	
宝暦7？	1757？	大和廻り手引案内		京都出発の大和の名所案内，小型本
明和6	1769	大和名所記	絵図屋庄八（奈良）	元禄版に奈良町部分増補
明和・安永頃	1770頃	広大和名勝志※		大和の寺社，名所等の紹介
安永3	1774	改正絵入南都名所記	絵図屋庄八（奈良）	
天明3	1783	大和古跡道のしをり	千葉清蔵（奈良）他	大和の名所案内
寛政3	1791	大和名所図会	京都書林（京都）他	大和の寺社，名所等の紹介

寛政7	1795	平城坊目考※		奈良坊目拙解を改変
寛政9	1797	改正絵入南都名所記	絵図屋庄八（奈良）	安永3改版
文化2	1805	改正絵入南都名所記	〃	安永3改版
文政元	1818	改正絵入南都名所記	〃	文化2改版
文政10	1827	改正絵入南都名所記	〃	文化2改版
天保12	1841	改正絵入南都名所記	〃	宝暦4改版
嘉永5	1852	改正絵入南都名所記	〃	宝暦4改版
万延2	1861	改正絵入南都名所記	〃	宝暦4改版

江戸期の奈良に関する案内記類は，寺社記（南北二京霊地集，和州寺社記），寺社を中心とした名所案内（京童跡追第三，南都名所集，奈良名所八重桜，和州旧蹟幽考，南都名所道筋記など），町の来歴などを記した地誌的なもの（奈良曝，奈良坊目拙解，平城坊目考）に分けられ，さらに，奈良町についてのものと大和全域についてのものに区分される。1600年代後半から1700年代初めに発刊時期が集中しており，これは，大仏開眼供養，大仏殿再建といった事業との関連が大きい。当時の奈良奉行所与力であった玉井定時らが記録した「庁中漫録」の『大仏殿再建記』から古川（2000）は，大仏・大仏殿の修復・完成時だけでなく，工事中にも多くの人々が奈良を訪れ工事そのものが大規模な見世物と化していたと指摘している。大仏修復事業は1660年代から開始され，1668（貞享5）年の大仏殿木作始の観式にも多くの見物人が訪れたとされ，その後大仏開眼供養は1692（元禄5）年，1709（宝永6）年に大仏殿落慶大法要が行われている。この一連の事業にあわせて奈良への関心が増加し，1600年代後半には奈良に関する案内記類の発行も増加したと考えられる。開眼供養後の時期に『南都名所記』『大和名所記』が発刊され，その後，この二種類が改版を重ね，奈良の案内記類の代表的なものとして流布したと考えられる。

東大寺に関する一連の事業の後は，大和全域の案内としては，1700年代末には，『大和名所図会』が発行されるなど，1700年代を通じて数種の案内記類がみられるが，奈良町に限定した案内に関しては，1700年代から絵図屋庄八による『改正絵入南都名所記』が版を重ねるだけで，新たな案内記類は

発刊されていない。1800年代に至っては，大和全域についての案内記類は発刊されることはなく，奈良町については，『改正絵入南都名所記』が版を重ねるだけであった。同書は江戸期に８版が数えられるが，白石（2005）によれば，1774（安永3）年版と1797（寛政9）年版以降では興福寺領・春日社領の石高が違っていることが指摘されている。しかし，1827（文政10）年版，1841（天保12）年版，1852（嘉永5）年版の３版を比較した郡（2013）は，文字遣いや振り仮名など内容としては改訂された部分はないとし，挿図の鹿の模様の描き方に相違がある点を指摘している。案内記類の文字情報は1700年代までの情報に，その後新たな情報が加えられることがほとんどなかったと言える。

３．近世の案内記類での奈良の鹿

これら案内記類での鹿に関する記述を整理すると表2のとおりである。すべての案内記類の内容を確認できていないが，おおよその傾向は把握できる。

表２　近世の奈良に関する案内記類での鹿の記述

発刊年		表題	鹿に関する記述	挿絵
万治2	1659	南北二京霊地集	【春日大明神】…神護景雲元年夏時風秀行二人ヲ氏人ニ成玉ヒ白鹿ニ乗先伊賀ノ名張ノ郡夏身ノ郷ニ渡リ同年十一月九日添上郡三笠山ニ移玉フ	無
寛文6	1666	和州寺社記	【春日社】…神護景雲元年六月二日中臣連時風秀行と云者弐人を氏人としたまひ白鹿に駕榊枝を以て鞭とし，…伊賀国名張乃郡夏身郷に渡り同年の冬…同十一月九日添上郡三笠山に移り	無
寛文7	1667	京童跡追第三	【春日】…神護景雲元年六月廿一日常陸國鹿島より武雷命。白鹿にのりたまひ。榊の枝を鞭とし，伊勢名張の郡にましまし中臣の連。時風秀行など供し奉り。同二年正月九日三笠山にいたらせたまふ。 【八景】春日野鹿　かすが山みねのあらしやさむからん野へにふもとの鹿ぞ鳴くなる 権中納言公勝	鹿挿絵有

延宝3	1675	南都名所集 巻一	【春日野】かすがのの雪間を分けてまふでくれば，神の御幸ある御旅所，草のはつかにみえわたる。常は御殿もなくて，鹿のむれゐるもをかし。 露わくる木のしたとほき春日野のをばなが中のさをしかの声　藤原冬嗣 春日野鹿は八景第一なり。 勧修寺参議右大弁経重 無臭無声野色妍　臭無く声無うて野色妍なり 只看麋鹿食草眠　ただ看る麋鹿草を食んで眠ることを 舜深山与文霊囿　舜の深山文の霊囿と 斯処聖神易地然　斯の処の聖神，地を易ば然らん かすがやまみねのあらしや寒からんふもとの野べに鹿ぞなくなる　清水谷権中納言公勝 【大宮御殿】…神護景雲元年六月に武雷命，常陸国鹿島より白鹿にめされ…	鹿挿絵有
延宝6	1678	奈良名所 八重桜	【春日四所明神】…同年霜月九日戊申の日寅の一天に，白鹿に駕り，くらの上に榊をたて，榊枝上に雲たなびき，雲の上に神鏡とあらはれ，同じ国添上郡春日山渡御したまふ。 【春日野】この野は，鹿道の辻の下西に有り，むかしより名所にして，春日野の鹿，南都八景の第一なり　勧修寺参議右大弁源経重 無臭無声野色妍　只看麋鹿食草眠 舜深山与文霊囿　斯処聖神易地然 春日山岸のあらしやさむからむ麓の野辺に鹿ぞ啼きける	鹿挿絵有
延宝9	1681	和州旧蹟 幽考	【春日明神】…又白き鹿にめして，鞍の上に榊をたて，そのうへに五色の雲あり 【春日野】 拾玉集 おもはなん思へば袖に露ふかしそよ春日野の棹鹿の声　慈鎮 【率川】…爰を鹿道といふ事は，春日明神鹿にめしてうつり給ふ道なればなり。	無
貞享元	1684	南都名所 道筋記	【春日大鳥居】…是より御社のほとりまてを春日野といふなり 露分る木の下遠き春日野の尾花が中の小男鹿の聲　藤原冬嗣 【鹿道】…大明神鹿にめしてうつりたまふゆへ名付けたり。	無
貞享4	1687	奈良曝	【春日社等】…此辺を春日野といふ歌などによめる春日のの鹿南都八景の内なり	無
元禄9	1696	大和名所鑑	【奈良春日町】…鹿多くみへ余国の犬のごとし是春日大明神の使者成とて此所の人民おそれをなす	鹿挿絵有

元禄15頃?	1702	南都名所記	【鹿道】…大明神鹿に召うつりたまふゆへなつけたり	有（鹿挿絵無）
享保11	1726	大和志	【春日祭神四社】 …山中鹿多都下人家亦畜之如犬甚忌殺傷　祝家相傳神護景雲二年神跨鹿自常州鹿島来鎮座于此	無
明和6	1769	大和名所記・絵図屋庄八版	【鹿道】…大明神鹿にめしうつりたまふゆへなづけたり	無
明和安永頃	1760頃	広大和名勝志	【春日野】 南都八景春日野鹿　勧修寺参議右大弁源経重 無臭無声野色妍　只看麋鹿食草眠 舜深山与文霊囿　斯処聖神易地然 清水谷権中納言公勝 かすがやま峯のあらしや寒からんふもとの野邊に鹿ぞなくなる　藤原冬嗣 露分る木のしたとをき春日野のおはなが中のさおしかの聲	無
天明3	1783	大和廻り道の枝折	【春日大明神】…神使のよしにて山にも町にも鹿多し	無
寛政3	1791	大和名所図会 巻之一	【春日野】 奈良八景 春日野鹿　勧修寺参議右大弁経重 無臭無声野色妍　臭無く声無く野色妍たり 只看麋鹿食草眠　只看る麋鹿の草を食して眠る 舜深山与文霊囿　舜の深山と文の霊囿と 斯処聖神易地然　斯の処聖神地を易れば然り 同 春日山峯のあらしや寒からんふもとの野辺に鹿ぞなくなる　清水谷権中納言公勝 【率川】 …ここを鹿道といふ事は，春日明神鹿をめしてうつりたまふ道なりといふ。	鹿挿絵有
安永3ほか	1774ほか	改正絵入南都名所記	【鹿道】…大明神鹿にめしうつりたまふゆゑ号けたり。	鹿挿絵有

近世奈良の案内記類における鹿の記述は，武甕槌命が鹿島から白鹿に乗って移動した話を紹介する例，南都八景の一つ「春日野の鹿」として歌の紹介はみられるが，実際の奈良の鹿の態様を示す記述は，『大和名所鑑』（1696）の春日野の項目に，「鹿多くみへ余国の犬のごとし是春日大明神の使者成とて此所の人民おそれをなす」，1726（享保11）年の『大和志』の春日祭神四社の項目でも，「山中鹿多都下人家亦畜之如犬甚忌殺傷」と鹿が犬のごとく多いことを記している。また，『大和廻り道の枝折』（1783）の春日大明神の項目に

「神使のよしにて山にも町にも鹿多し」と，鹿が多いという記述があるが，これらの記述が確認できるだけである。江戸期の奈良への来訪者の鹿の捉え方については，水谷・平（2018）において道中日記と紀行文を検討している。道中日記203例中75例で鹿に関する記述が見られ，鹿が人馴れしている状況についての記述は，1771（明和8）年に「鹿のかし」を購入した記録がみられ，最も早い事例であり，それ以降は「此山鹿多し。人を恐れず。参詣の人菓子を調へあたへる故，参詣の人と見れば，方々より鹿むれて来る也。子供多く出て菓子をうる也。」（1804（享和4）年），「せんへい買候而鹿へたべさセ申候へ者よくたべ申候」（1812（文化9）年），「林の中かよりも鹿多くあつて，旅人通りけるヲ見付，追々出テくる事，町々の犬の如くぞありけり。」（1813（文化10）年）など，1800年代はじめから後半になるにつれ事例が増え，計14例確認されている。また，紀行文では，1783（天明3）年の『旅の道草（保紅）』までは鹿と人との関わりに関する記述はみられないが，1825（文政8）年『大和廻覧道中日記（原得斎）』において「また鹿の往来恰も家々の狗猫のことく旅人を見れり袂にとり付裾にまとひ菓子を乞ふいと馴～しく面白し」と人馴れの様子，食べ物を介した関係が描かれ，これ以降の紀行文は1例を除き5例で同様に人馴れ，食べ物を介した関係の記述が確認される。

1800年代はじめまでには鹿が人に馴れ，食物を介して人と鹿が接触する状況が生じていたが，その状況を記す案内記類はみられない。鹿は南都八景の一つの景物として記述されるにとどまり，それも歌に詠まれた景としての紹介であり，実景の記述とはなっていない。これは，前章でみたように，近世の奈良に関する案内記類のほとんどが1700年代までに発刊され，1800年代には『改正絵入南都名所記』以外は発刊されず，絵図屋庄八のこの冊子も文章の改訂がなされなかったという案内記類の発刊のタイミングと関係していると考えられる。鹿と人との接近した関係について名所記に記す機会がなかったといえよう。

一方で挿絵がある案内記類には鹿の様子が描かれるものは多い。猿沢池周辺に鹿と人がともに描かれている挿絵は，『京童跡追』（1667），『南都名所集』（1675），『奈良名所八重桜』（1678），『大和名所鑑』（1696）にみられ，

表３　明治期以降，第二次大戦前の奈良に関する案内記類での鹿に関する記述内容

	和暦	西暦	タイトル	編著者	出版者	鹿に関する記述
1	明治 14	1881	奈良名所一覧	橋本輿八郎	辻本九兵衛	鹿に関する記述なし
2	明治 22	1889	内國旅行　日本名所圖繪	上田文齋		此邊に鹿園とて往昔より多少の鹿を飼養ふ例あり
3	明治 23	1890	平城坊目遺考 上，付録	金沢昇平	阪田稔	【春日社】　武甕槌命・・白鹿に乗鞍の上に五色の雲へりと云へり 【鹿ノ角伐】　寛文中一年十月十六日鹿を捕へ竹垣へ入是ハ鹿秋季になると角固く人を突クことあり依而仝十二年より鹿角伐始る皇政維新迄毎年秋彼岸中に行之其日奉行所より輿力同心郷同人等出張角伐ある町内ハ町門を堅く鎖し角伐に係る人の外ハ出入を不許（西之坂東之坂）屠者手に革袋を用い縄網（タンヒと云）を持鹿の角に打懸け押倒して角を伐る又角を手捕にして倒して伐ルもあり角を伐リたる鹿は門外へ放ち遣る参観人は當日早朝より角伐リある町之人家の店格子或は店先キにて見物する又屋根に登り見るひともありの荒レ廻るを縄網にて追駈るハ危険の中に面白き事なり鹿ハ角伐リの十日計リも前より所々より？出して堅固なる構への中に入れ置瓜茄子豆腐殻等を與へ養ひ置ク實ニ土地ノ一奇観なり一新の後此事絶たり
4	明治 24	1891	大和名所巡覧記	金沢昇平	阪田一郎	【春日若宮】　春日社境内燈籠多し神鹿群居る
5	明治 24	1891	奈良名所袖鑑	金沢昇平	阪田一郎	【春日大宮】　遊鹿數頭人に馴るる食物を手をもて與ふこの地の一奇観なり
6	明治 25	1892	大和巡り四日の旅行	赤堀自助	赤堀自助	【春日神社】　・・殊に鹿群の人に馴れて食を乞ふ状旅客の目には珍しからん
7	明治 25	1892	奈良名所案内詞	鳥居武平	購文堂	【菩提院】　演劇院本には十三の兒童鹿を殺した科によつて石子詰の刑に處したと世に名高き舊蹟は此所でムサテ又鹿はむかしより奈良では大切にしたものでム　其譯は春日大神が白鹿に乗て御笠山に御遷幸なされた故でム　中世奈良奉行所でも大層保護なされた事で毎年鹿が子を産む時分には犬が徘徊せば町はづれへ追出せといふ御觸が出まして奈良町中には一疋の犬も飼ひませんそれゆゑ鹿が澤山市中へ出たのでム　又犬追ひと申事もムりました奉行所と興福寺の役人行列にて町々を巡回したでム　鹿が市中で怪我するか死する事あれば大變な騒ぎでム　鹿の角伐は今より二百二十二年前寛文十一年に始まり御一新までは毎年秋の彼岸中に角を伐たでム　何故と申せば人を傷つける事たびたびあるでム　奈良の人は其頃には，さけて近づきませんが他所のお方はしりませぬゆゑ怪我する事がムります　サテ其角伐をしますに御一新までは町内の門を堅くとざしまして関係人の外出入を禁じました　當日には奉行所より諸役人出張します又角を伐る人夫はけふをはれと着飾りまして多人數出張します其よそほひは中々の見ものでありました
8	明治 25	1892	全国鉄道名所案内	野崎左文	巖々堂	春日山は春日神社の後に聳ゆる丘陵にして古来著名の勝地、同神社より登り二十町許いなり、山巓を本宮ヶ嶽と云ひ山中鹿、猿多く其北に連互せる小峯を三笠山と呼び
9	明治 26	1893	改正画入奈良名所記	絵 図 屋 庄 八 原著，塚田武馬増删	筒井梅吉	【菩提院】・・石子詰の處刑妄説なれども古蹟はここなり 【鹿道】・・かすが大神鹿にめしてうつりたまふゆへなづけたり
10	明治 26	1893	日本名勝地誌. 第壹編	野崎城雄	博文館	【雪消澤】・・緑艸澤邊に滋蔓し所謂春日野の鹿其間に起臥して幽趣拾い盡し難く

11	明治27	1894	全国鉄道賃金名所旧跡案内	林荘太郎		又神鹿と稱し社の内外群鹿所々に徘徊す毎年三月九日十日神鹿角切り祭を執行し又三月十五日及十二月十七日に大祭ありて勅使参向儀式頗る嚴肅なり
12	明治28	1895	京都名勝案内記附聯合府縣	金森直次郎	飯田信文堂	【春日神社】　神鹿と稱して社の内外に群鹿徘徊す毎年三月九日十日神鹿角切の祭あり大祭は三月十五日十二月十七日の両度にて
13	明治28	1895	奈良のしるべ	水木要太郎	辻本朔次郎	【神鹿】　神護景雲二年春日大神鹿島より御遷幸の節白鹿を率ゐ給ひき。されは當地のは神鹿と称へて古より大切にしたることは建治年間中臣祐賢の記録には神鹿殺害せし者を搦め捕りし者には賞を行ふべき由見えたるにても知るべく又町内には犬を飼ふことなく鹿の子を生む時分には犬を町外に逐ひ出したりといふ故に時には鹿の市内にも出でて人を害することもありしがは寛文十一年より毎年秋季に角伐を行ふこととなりしが維新後此事廃絶せり（但明治廿四年に一度行へり）又鹿は野外に出でて穀菜などをあらすこと甚しかりたれば町の四外は鹿よけの塀をつくりて之を防げり然るに維新後鹿を砲殺する者さへ出て来て漸次に減少せしかは明治十一年堺縣達を以て其傷殺を禁じ明治廿三年奈良縣令を以て傷殺禁止区域を本社境内及び奈良公園地と改められたり。又明治廿五年より神鹿飼養場を設け益保護の道を盡せり。
14	明治28	1895	袖珍奈良のしるべ	水木要太郎（不孤庵）編	辻本朔次郎	鹿に関する記述なし
15	明治28	1895	奈良の名所	水木要太郎	豊住幾之助ほか	【十三鐘】　・・俗に小兒鹿を殺して石子詰にあひしといふ古跡はこの處なれどもその事は妄誕なり。 【神鹿】　・・春日参詣の道にも鹿の多く戯るるを見るべし。當地のは春日の神の鹿島より遷らせ給ひし時伴はれ給ひしとて（神鹿）と稱へ古より大切になして以前には市中に犬をも飼はざりしといふ
16	明治28	1895	全国鉄道名所案内	野崎左文		春日山は春日神社の後に聳ゆる丘陵にして古来著名の勝地、同神社より登り二十町許いなり、山巓を本宮ヶ嶽と云ひ山中鹿、猿多く其北に連互せる小峯を三笠山と呼び
17	明治30	1897	奈良名勝順路案内	市川源治郎，塚田武馬	阪田一郎	【春日野】・・此邊鹿多し名所の一なり 【菩提院】・・名高き石子詰處刑の説は當院なれども妄誕なり信ずべからず 【鹿道】・・春日大神御蓋山に遷りましし時白鹿に乗りて御通ありしより此名ありとぞ
18	明治30	1897	東海東山畿内山陽漫遊案内	野崎左文	博文館	【春日神社】　・・其の境内には群鹿人に馴れて其處ここに徘徊す又社域に燈籠の多さは實に驚くばかりにて
19	明治31	1898	大和周遊誌 美術淵源，上編	鳥居武平	大和図書出版本舗	【春日野】　・・此邊神鹿多し能く人と親めり春日野の鹿即ち是なり或人詠る　馴れたりとしらておどろく旅人の　たもとにすがる春日野の鹿
20	明治32	1899	千山萬水	大橋又太郎	大橋又太郎	【奈良の古都】　・・一の鳥居を行けば無數の鹿ども右に左に纏綿ひて馴れ睦む様の愛らしさ，一同興がりて糠煎餅に財布の底をはたき，雪消の澤に昔を忍びて，二の鳥居より進めば・・・・日も西山に傾けば急ぎ足を其處を立去りて，また一の鳥居の邊に歸るに，折しも牧童が吹きすさむ一聲の短笛に，今まで野に伏し丘に臥したる男鹿女鹿のわれ遲れじと，構柵の中に馳せ入るまま，柔順にしてよく牧者と睦まし，紅葉の秋には如何に興あるべきや
21	明治32	1899	奈良繁昌記	西田誠三	西田誠三	【十三鐘】　・・俗に小兒の鹿を殺しし罰により石子詰にあひしと云ふは此の處なり 【神鹿】　此の邊り（浅茅ヶ原の遊園）より神鹿の群れつつ遊び居ること漸く多くなりて来遊者の咫尺に迫りて餌乞ふ様愛らしとも云はん方なし手して餌を與ふるに更に恐るる様なく静かに食し終つて去る

						【鹿の角伐】　秋季は鹿の角固くなりて或ひは人を突き傷つけ若くは相闘ふて傷くの恐ありとて寛文の十二年初めて角伐なるものを始めたるが爾来星移り物換り何時しか此の制も廢れ居りたるを去んぬる明治二十六年これを再興したり 【鹿苑】　あり木柵を結ひ廻らして神鹿の飼養を爲す
22	明治 32	1899	奈良名勝便覧	筒井梅吉	筒井梅吉	【菩提院】　・・世俗に小兒鹿を殺して石子詰にあひしと云ふは妄説なり
23	明治 34	1901	吉野名勝誌 附大和名所	西崖主人	信田幾次郎	【菩提院】　鹿を殺したる小兒を此にて石子詰にせしといふは俗説なるべし。
24	明治 36	1903	大和名勝（日本名勝第一集大和國）	藤園主人述（池邊藤園）	金港堂書籍	【春日神社】　次に目につくは彼の群鹿なるべし。大鳥居を入ると共に，彼の遊べる鹿どもは人を慕ひて寄り来ること，さなから手飼の犬のその主に於るがごとし，こは神鹿とて，神の使者と稱し，古へよりことに保護を加へあれば，かくしも馴れ睦べるなり。參詣者は之に餌を與ふるが例のやうになりをれば，社内處々の休息店には，必ずその食物を賣りをれり。故に人の多き處，鹿尤多きなり。維新前はこの鹿を殺ししものは死刑に處せられたりといへば，その鹿の跋扈せしことおもひやらるべし。毎年十一月の初，角伐神事とて，社内に荒垣を結ひ廻らし，山中の鹿を悉く一所に追ひ込め，男鹿の角を切り落す事あり。この時は四方よりの見物人多く鐵道も割引券などを發行するほどにて頗る盛況なり。かくの如く春日社には鹿の因縁深ければ，社の内外の小賣店には，鹿角の細工物又は鹿の形を造り成せるもの多し。 【十三鐘】　鹿を殺したる小兒を此にて石子詰にせしといふは俗説なるべし。
25	明治 36	1903	大和巡	水木要太郎	第五回内国勧業博覧会奈良県協賛会	【奈良公園】　・・春日野に千年の老杉根を交へ神鹿優々として遊べるが如きは一種言ふべからざる神韻を認むべく 【春日神社】　春日野は・・一歩進むに随ひて老杉枝を交へ群鹿友を呼び境愈幽に景愈妙なり
26	明治 36	1903	大和引路誌要　A guide to Yamato	水木要太郎	奈良県協賛会	【春日野】　・・群鹿狎人 【KASUGAJINJA】　・・There are many hundreds of stone lanterns about the grounds and numerous tame deer, which are objects of interest to many people
27	明治 36	1903	奈良名勝誌 附大和名勝	木原近藏	木原近藏	【菩提院】　俗傳に曰く昔し十三歳の幼童鹿を殺したる咎によりて此寺内にて石子詰に遇ひたり故に又此地を石子詰といふと信偽は保し難し 【春日野】　・・樹木鬱蒼として神鹿多く徘徊す・・ 【雪消澤】　・・緑草の敷きつめたる邊，神鹿逍遥し遥かあなたに高圓山等の遠山を望む・・
28	明治 36	1903	日本海陸漫遊の栞 西部	野崎左文，洲崎栄芳	六々会	【雪消の澤】　・・春日野の鹿は，此の間に起臥し，幽趣名状すべからず。
29	明治 37	1904	奈良名所案内圖繪	小泉由松	小泉由松	【神鹿】　神鹿は春日の名物の一つで，其數無量數百，公園内到る處に逍遥して能く人に馴れ，餌を得んと慕ひ寄る様まことに愛らしいものである
30	明治 38	1905	日本漫遊案内 下巻	坪谷善四郎	博文館	【帝国奈良博物館附近】　・・此の邊の原野中に春日の神鹿數百頭を養ひ，毎年春季彼岸鹿の角伐を行ひ公衆の観覧に供す
31	明治 38	1905	大日本地誌　巻四近畿	山崎直方編	博文館	【春日の神鹿】所謂神鹿は，或は芝生の上，或は小流の畔，或は路傍，或は樹蔭に，三々群を爲し，伍々隊を作りて，其の無邪氣に，人の近くを怕れざる，頗る奇なり。徳川幕府時代に於ては，この鹿を尊ぶこと一方ならず，誤

						つてこを戕ふも，猶死罪に處せらるるを例とせしもの，今はさることは無けれど，官猶厚くこれ飼養し，春季彼岸を時とし，有名なる鹿の角切を行ひ，公衆の観覧を許すを以て，遠近来り見るものはなはだ多しと言ふ。
32	明治 39	1906	英和奈良問答	牧浦房蔵／ミツス・キンボール，水木要太郎校閲	牧浦房蔵	【鹿と石燈籠】鹿が澤山居る事．何とおとなしいではありませんか．／Such a number of tame deer! How gentle they are! 奈良には何故鹿がかやうに多いのですか．春日様が當地へ御出の節は鹿に乗て御出になつたと申して神の御使ひ者ですから．古来殺生を禁じてゐます．／Why are the deer so numerous in Nara? The god of Kasuga is said to have come to Nara on a deer's back, and it being his favorite animal, killing one has been forbidden from old time. The deer are sacred.
33	明治 39	1906	奈良名勝記	稲垣青丹	筒井梅吉	【菩提院】　・・石子詰處刑の説あり 【春日野】　・・山野風雅に群鹿多く巨杉鬱蒼の間に徘徊す
34	明治 42	1909	鉄道院線沿道 遊覧地案内	鉄道院		春日野の平蕪草色煙の如く，幾群の麋鹿悠々徘徊して，能く人に馴る、
35	明治 43	1910	鉄道院線沿道 遊覧地案内	鉄道院		【春日神社】　いはゆる神鹿は詣人の奇とする所，或は芝生の上或は小流の畔，或は路傍に或は樹蔭に，三々群をなし伍々隊を作りて，人の袂をひいて食を乞ふさま愛すべし，春季彼岸に行ふ鹿の角切，また一奇観と稱せらる。
36	明治 43	1910	西部鉄道管理局線名勝遊覧案内	森永規六	浜田日報社	【春日神鹿】　春日神苑内に放飼し其数無量数百頭春日野及公園等到る所に徘徊し能く人に馴れたり　抑も春日神鹿の起源は神護景雲二年春日大神鹿島より御遷幸の砌白鹿を此地に率ひられしより繁殖せしものなりと云ふ　毎年秋季鹿の角伐とて春日野に柵を廻らし多数の鹿を之に逐ひ入れ鐘鼓を打鳴らしつゝ逃げ廻る鹿を捕へて其角を伐り取る神事あり　当日此の壮挙を見んとて遠近より来る者多し
37	明治 43	1910	新撰名勝地誌．巻１畿内之部	田山花袋	博文館	【奈良市】　・・奈良公園にして，麋鹿の青草の間に逍遥するを見るべく， 【春日の神鹿】　所謂春日の神鹿は，或は芝原，或は小流の畔，或は路傍，或は樹蔭に，三々群を為し，伍々隊を作りて，其無邪氣に，人の近附くを怕れざる，頗る奇なり。徳川時代に於ては，此神鹿を尊ぶこと一方あんらず，誤つて之を戕ふも，猶死刑に處せらるるを例とせしもの，今はさる事無けれど，猶ほ官厚く之を飼養し，春季彼岸を時として，有名なる鹿の角切を行ひ，公衆の縦覧を許すを以て，遠近来り見るもの甚だ多しといふ。
38	明治 43	1910	大和大観	藤山豊	木原文進堂	【奈良八景】　春日野鹿 無臭無声野色妍　只看麋鹿食草眠　舜深山与文霊囲　斯処聖神易地然　参議右大辨経重 春日山みねの嵐やさむからん麓の野邊に鹿ぞ鳴くなる　権中納言公勝 【菩提院】　・・俗傳に曰く，昔十三歳の幼童，鹿を殺したる咎によりて，此寺内にて石子詰に遇ひたり，故に又此地を石子詰と云ふと 【春日野】　・・松杉鬱蒼として茂り，神鹿多く徘徊す， 【雪消澤】　・・緑草の敷きつめたる邊，神鹿逍遥し，遥かあなたに高圓山等の遠山を望む・・ 【春日神社】　・・又神白き鹿にめして，鞍の上に榊をたて，其上に五色の雲あり， 【馬止橋】　又鹿道橋或は善趣橋ともいふ，石橋なり，此の邊を鹿道といふ，春日の神此處に移りませし時，鹿に乗りて通り給ひし故名くと

						【飼鹿所】　所謂春日神鹿飼養所にして，鹿道の附近にあり，毎日夕に喇叭を吹きて，所々に逍遥する鹿を集めて此所に入れ，朝に門を開きて出す，鹿兒を哺乳する所も設けらる。
39	明治43	1910	七日の旅 ： 漫遊案内	落合昌太郎	有文堂	【大和巡り】　一の華表（とりゐ）の東を春日野，博物館の前を飛火野と云ひ人に馴れた神鹿數百若草を尋ねて犬の如しである
40	明治44	1911	奈良名勝案内枝折	大矢松吉		鹿についての記述なし
41	大正2	1913	帝国漫遊案内	日本漫遊案内社	明文館	【春日神社】　・・所謂神鹿は詣者の奇とする所，芝生の上，小流の畔，或は樹陰に，三々群を爲し，伍々隊を作りて,，人の袂を曳いて食を乞ふさま愛すべし。春の彼岸に行ふ鹿の角切，また一奇觀なり。
42	大正3	1914	大阪より奈良まで沿道名所案内	大阪電気軌道株式会社	大阪電気軌道	【春日の馴鹿】　・・子鹿親鹿群れて人懐つかしく慕ひ寄りて物を乞ふ様，甚だ哀れ深かし，春季彼岸に行ふ鹿の角切また一奇観と稱せらる。【春日の馴鹿】写真説明　春日の宮の群鹿は人に馴れ，友を呼びて到る所慕ひよる，奈良の物語の鹿によりて屡開始せらるるもの神使の名を耻めさるものと謂ふべし。
43	大正3	1914	大和名所案内	奈良県		

【石子詰の址】　大御堂の左前に在つて、土墳の上に二株の古楓が樹つて居る。昔十三になる稚児が過つて春日の神鹿を殺して、こゝに六つの鐘と七つの鐘とを合圖に石子詰の刑に処せられたとある。

【鹿と燈籠】　・・神鹿は約六百頭で，年々殖えて行く方である。春日境内のみならず公園到る處に悠々と連れ廻つて遊んで居り，人を見ると近寄つて頭を下げて餌を求める。餌は糠煎餅とキラズ團子で，所々に賣つて居る。神鹿飼養所が設けてあつて晩方になると番人が一定の調子で喇叭を吹く，其音で鹿どもは四方からゾロゾロと帰つて来て柵の中に入る。中には全く春日山中に棲んで居る山鹿もあつて，公園の里鹿とは習性も違ひ，人を見ると逃げる。喇叭が鳴つても帰らないで勝手に木の下や芝原で夜を送るのもある。町へもノソノソと出て来て，夜などは塵溜の菜の葉や芋の屑などを猟つて行く。全ての植物性の物ならば實は勿論，葉でも根でも何でも食つて，紙でも日本紙ならばムシャムシャと食ふ。公園の細い木の幹が，割竹で包んであるのは鹿に害させまい為なので，小さな一二尺許の杉や檜の植込を大層な木柵で圍つてあるものも是が為である。唯「あしび」（馬酔木，此地ではバチコと呼ぶ）だけは食はない，毒を知つて食はないのか，食はないのを知つて植ゑた者か，是が公園に大層茂つてる。犬を見ると逃げる，小さな犬ころが五六匹の大鹿を追立ててるのを屡見る。駆ける時には首を挙げて耳を後ろに倒して，白い尾をパッと開いて，四脚を一時に揃へてピョンピョン と跳ぶ。角は牡ばかりに有るのは無論だが，交尾期の秋になると牝を取り合つて，時々喧嘩を始める，首をグッと下げて角と角とで暫く押し合つて，一しきり揉合つて一休みしては又續けるので中々面白いものだ。「妻戀ふ鹿の音」と云ふが，全く交尾期に入つて雌を呼ぶ為に鳴くので，離れて聞くと笛の様で非常に遠く響渡る。併し平常の温和なのに拘らず，此鳴く頃になると鹿の氣が荒くなつて，時々人に突掛つて来る，婦人や子供などは殊に侮つてか掛り易い。神鹿保護に付ては，徳川幕府から五百石の朱印付けてあつたもので（興福寺朱印が同じく五百石）今は神鹿保護会の設けがある。

鹿の生立ちを言えば，交尾は秋で懐妊は十ヶ月，分娩は翌年の六七月頃である。生れた子鹿は高さ一尺五寸以内で，色は穢く斑紋が明に見えている。一ヶ月許は乳，それからソロソロ草を試みる。満二歳頃から角が生え始め，其翌年から追々枝が岐れて来る。生えた角は翌年の秋に落ちて又生え代り代りする。鹿の毛色は時節につて變る。三月末から所謂「かのこ毛」になり始めて，四月から五月で完全につて，茶色で光澤よく，斑紋が白く美しい。夏は此通りで秋の九月頃から毛が抜けかはつて，穢ない薄茶色でツヤも無く，紋も汚く，紅葉の頃となると全くの枯葉の色になつて冬を越す。紅葉の下に紋の美しい鹿を畫いた繪は全くのウソである。

鹿寄せは市や縣で賓客を待遇する時などの餘興に，倶楽部公會堂の庭などで行ふ事で，番人に出来る限り澤山の鹿を駆集めさせて，賓客に手づから餌を與へさせるのである。

角伐りの神事は，毎年十一月の適宜の晴天二日續き位に，神鹿保護會で行ふことだ。飼養場の傍らの芝生に竹矢来を結つて，入場料を取つて一般に見せる。鹿は豫め幾頭かを集めて矢来の内に入れて置いて，太鼓の合圖で一頭づつ取押へて，鋸で其角を伐る。餘程烈しい観物だ。（若草山の麓に其光景を作つてある店があるから縦覧するが宜しい）是れ一つには此節の角は人に危険だからの思付きである。

【神鹿飼養場】　同じく左側に石柵が見える。・・飼養場の南の芝生は角伐を行ふ處（鹿と燈籠の項参照）

44	大正 3	1914	An Official Guide to Eastern Asia Vol.2	鉄道院		【Sacred Deer of Kasuga】　There are about 700 tame deer roaming about in the grove of tall cryptomerias between the first and the second torii. They approach strangers in order to be fed (biscuits may be brought from the hotel or procured in the park). In the time of the Tokugawa Shogunate any person killing one of them was punished with death.　Though the penalty is not so severe now as in those days, still the deer are protected as belonging to the gods,—from a story that Takemikazuchi, one of the four gods worshipped in the temple, came to Nara riding on a deer, and it was he who afterwards induced three other gods to come. Every year the sharp ends of the deer's horns are cut, so that they may not injure people. The clipping takes place in the middle of October, occupying two or three days, when a crowd of people gather from the neighbourhood to see the process.
45	大正 4	1915	鉄道旅行案内	鉄道院		いはゆる神鹿は詣人の興がる所で，或は芝生の上或は小流の畔，或は路傍に或は樹蔭に，三々群れをなし伍々隊を作りて，人の袂をひいて食を乞ふさま洵に愛らしいものである，十月中旬に行ふ鹿の角切には遠くより見に行く人もある。
46	大正 7	1918	日本の名勝，科外教育叢書 ; 第 40	正木貞二郎	科外教育叢書刊行会	芝生の上，小川のほとり，樹々の蔭に三々伍々と隊を組んで，人の袂をひいて食を乞ふものは春日の神鹿である慣れたりとは知らで驚く旅人の　袖にすがるや春日野の鹿
47	大正 7	1918	大日本名勝史蹟	高木斐川，原坦嶺	公益通信社	【奈良帝国奈良博物館】　・・此の邊の原野中に，春日の神鹿數百頭を養ひ，毎年春季彼岸鹿の角伐を行ひ公衆の観覧に供す
48	大正 7	1918	汽車の窓から　本編	谷口梨花	博文館	【青丹よし奈良の都】　・・殆んど市の四分の一を占めて，今奈良公園と稱し，千年の杉と，柔らかい芝生と，匂ふ藤と遊ぶ鹿とが美しう此間を彩り　・・石子詰の古跡として名高い十三鐘がある。昔十三になる稚兒が誤つて春日野神鹿を殺して，此處で六つの鐘と七つの鐘とを合圖に，石子詰の刑に處せられたと云ふ，土墳の上に二株の古楓が樹つて古の哀を語つて居る，芝居の妹背山の三作の石子詰は此の傳説によつたものである。實際昔は春日様のお使だと云って，非常にこの鹿を大切にしたものだ，鹿を殺して死刑に處せられた話はいろんな物語に書いてある。　・・其杉の大木の生ひ茂つた下の芝生の上や小流の畔，或は樹陰に或は路傍に，いはゆる春日の神鹿が三々五々群をなし隊を作りて遊んで居る。人が通ると馴々しく近寄つて 來て，袂をひいて餌を求むるさまは如何にも可愛らしいものである。餌は糠煎餅とキラズ團子で，所々に賣る店がある，餌をやるのを見ると其處らあたりに居る鹿が，皆走り集まつて來る，鹿の優しい悠長な姿と、餌をやって遊ぶ自分の心とがぴったりと合つて落ついた氣分になる、何となく自分も奈良朝時代の人となつた樣にも思はれる。
49	大正 8	1919	奈良名所案内	栗林貞一	藤田三思堂	【十三鐘】　往昔十三才になる稚兒が，誤まつて春日の神鹿を殺した爲め，此處で石子詰めの刑に處せられたと云ふ。此の傳説は或は眞実でないかも知れないが，だと云つて一概にけなしたくはない。斯うした演劇的なローマンスがあるによつて，奈良のなつかしさが一層増すのである。 【浅芽ヶ原】　・・神鹿の悠々と遊び戯れてゐる様眞に繪のやうである 【神鹿飼養場】・・夕方になると公園各所に散らばつてゐる鹿を其処に追ひ込み，朝になると放し出す，毎年十月中旬に行はれる鹿の角伐りは，この右側に高い木柵を設けて行ふ（別項年中行事参看） 茲で少し神鹿の事を書いて置かう。神鹿は現在八百頭位で，年々増加しつつある。悠々芝生を彷徨し，又は来遊者に馴れなれしく餌を乞ふ様は仲々に珍しく，奈良と鹿とは離すべからざるものとなつてゐるが，それと共に市民の受ける損害も少なくない。近年は神鹿保護會と云ふのが出来て，番人を置き餌を與へたり，世話をやいたりしてゐるが，数が増えると共に餌料

					が缺乏し，夜更に市内の民家を襲ふは勿論遠く市街に接した田圃に行て，麥や稲や野菜類を，一夜の間にでもごつそりやつて了ふ。で，農民は大いに憤慨して，時々撲殺したりするが，それが分つて悪くすると傷害罪で告發されるので，其の防禦方法に困り屢々春日神社や，神鹿保護會へ迫るが，適當な善後策が講じられないので，毎年春秋の二回には悶着の種となつてゐる， 鹿は平生は温順しいが，秋の交尾期と，五六月頃の牝の分娩期とは，氣がたつてゐるから，ともすると角で突かれたり，蹄でうたれたりして，中には即死する者もある，一般遊覧客は馴れなれしく近寄つて来ない鹿は，なるべく避けるやうにし，悪戯なぞをして馬鹿な目に逢はぬやう注意するが肝要である。 「鹿寄せ」は賓客を待遇する為め縣や市が行ふもので，鹿守りが喇叭（小さい玩具のやうな）を吹くと，それを聞き付けて集まつて来る，それに餌を與へるので随分見事なものである。皇太子殿下は大變此の催ほしが御好きで，奈良へ行啓ある毎に行はせ給ふと承はつてゐる。鹿の交尾期は秋で，古来から歌にも詩にも詠まれてゐる妻戀ふ鹿の音は，全く牡が牝を呼ぶ聲である。秋更けて落葉を淋しくたたく公園に立つてその聲を聞いてゐると，宛然奥に喰入る思ひがして，秋の寂寥が一入深く感じられる，懐妊は十ヶ月で，分娩するのは翌年の五六月，生れて間もなく小犬のやうな可愛らしいもので，親鹿の後をついて歩いてゐる，猛犬に喰殺されたりするのは此の時分である。満二歳頃から角が生へ始め，追々枝が出来て来る，一人前になると毎年秋に脱落して春に生える。その落ちる前になると野性を發揮して，樹木や，土や，他の鹿のと擦合したりして角を磨く。公園の細い木の幹を包んだり，木柵を圍つたりしてゐるのは，鹿が角で皮を剥いて了ふからである。 【神鹿の角伐り】　奈良の年中行事の内でも，面白いものの一つである。日は決つてゐないが，毎年十月十七日の神嘗祭頃に二日間，春日神鹿保護會の主催で行ふ。昔は秋になつて角を持つた鹿は危険だから切つたのだらうが，今では純然たる催し物となつてゐる。 行ふ日が決定すると，保護會では數日前から準備に係る。先ず春日神鹿飼養場（馬止橋の突當り）の南側に長さ三十間，廣さ七八間位の長方形の高い竹柵を作り，その上へ桟敷を設けて見物席に當てる當日になると角をもつた鹿約三十五六頭を，この柵の中に追ひ入れ出口を塞ぎ，午前十時頃から愈々角伐りに着手する。鹿を引捕らへる爲めの勢子二十餘名は，何づれも法被を着し黄な鉢巻に，黄の帯をしめ，各々縄でかがり竹の柄をつけた掬網を手に持ち，外に鹿守り，世話方なぞが，柵の中に入つて鹿を捕らへるべく追立てる。鹿は何の様な危害を受ける事かと，眼を血走らし，角を振立てて彼方此方と逃げ惑ふ様實に怖ろしい許りである。勢子はそれを程良き所に待ち受けて，掬網を角の又に引つ掛けたり，或は直ぐに手で角を引つ掴んで引き摺り倒さうとする。しかし鹿も中々強いから悪くすると角で突かれたり，取つて抛げられたりして，大怪我をする事がある。 その内誰かが一匹の鹿を取つて押へかけると，他の者が相集つて手取り足取り其の場に横倒しにする。そして鹿の頭の下に枕をかうしてしつかと押さへ，角を鋸で切り取る。角をとられた鹿は，何んだか勝手が違ふぞと云ふやうな顔をして柵の外へ逃げ出して行く，凡そ五六頭切ると太鼓を叩いて休憩する。 之を見んとするものは，十銭入場料を出して桟敷の上に上らねばならぬ。だが運の良い人は，抽籤によつて此の切り取つた角を貰ふ事が出来る（最初に切つた角は春日神社に奉獻する）
50	大正 8	1919	ならゆき大軌電車沿線名所案内	穴田長次郎	日本弘栄社	【春日の鹿】　奈良は鹿の名所又能く人に馴れて到る所に子鹿親鹿群をなせり，現在約壹千頭，猶ほ年々増加しつつあり，悠々芝生を彷徨し又は来遊者に馴れ馴れしく餌を云（こ）ふ様實に世界の珍とすべく毎年十月中旬に行はるる鹿の角伐りは其奇観求めて他に得べからず。
51	大正 8	1919	神まうで	鉄道省	博文館	【春日神社】　・・春日野には博物館や物産陳列所や公會堂や倶楽部の建物がある。其杉の大木の下の芝生や小流の畔，或は樹陰に或は路傍に，いはゆる春日の神鹿が，三々五々群をなし隊を作りて遊んで居り，人の姿が見えると馴々しく近寄つて来て，袖を引いては餌を求むる。
52	大正 9	1920	史蹟名勝天然記念物.前編	瀬川光行	史蹟名勝天然記念物刊行会	【三笠山下】　春日神社の神鹿は其數最も多く，猿澤池畔より神苑の邊に逍遥して賽人を迎ふ人に馴るること畜犬以上なり，此群鹿の三笠山下に集まるもの甚だ奇観にして人之を呼べば首を垂れて来り親まんとす實に是れ好個の畫材たり。
53	大正 10	1921	近畿遊覧一日がけと泊りがけ	近畿遊覧社	近畿遊覧社	【十三鐘】猿澤の池の東にある，昔十三になる稚兒が誤つて春日の神鹿を殺した罪で，六つと七つの鐘を合圖に石子詰の刑に處せられたこいふ悲しい石子詰の古跡は・・ 【春日野】・・又芝生の上にいはゆる春日の神鹿が，三々五々群を成して遊んでゐる等，のんびりとした奈良の氣分が漲つてゐる。

54	大正 12	1923	新撰鉄道旅行案内	安治博道等	駸々堂旅行案内部	この附近一体には古杉老松茂つて樹下に神鹿の遊ぶさまも古都の俤を偲ぶに足る。
55	大正 13	1924	近畿遊覧その日帰り	金尾種次郎	金尾文淵堂	【十三鐘】　十三才の子が石子詰に遇ひし傳説とるに足らざる妄説である。一の鳥居を過ぎて東すれば，老杉深緑を漂はして，芝草の青き美はしく，三々五々神鹿の行き交ふ様は眞に日本第一の樂園である 糠煎餅を與ふれば，忽ち郡襲して人を恐れざる樣愛すべし春季彼岸鹿の角伐神事あり，拝観者雑沓する事夥し。　小男鹿に手拭貨さん角の跡
56	大正 14	1925	An official guide to Nara = 英文奈良案内記	Nara Prefectural Government Office	The Nara Prefectural Government Office	Deer and Lanterns: The people of Nara are not behindhand in matters of calculation when they say that the precise number of deer is as unascertainable as that of the lanterns in and out of the shine. (中略) Unmolested and perfectly happy in the grassy and wooded world of their own, some 700 deer graze in the park, mingling with the passers-by or else frolicking with children. At curfew, they respond to the call of the trumpeter, and hie their way to their place of rest — a spacious enclosure just below the Kasuga Shrine. The deities, it is said, hearken to the prayers of their pious when communicated through the divine messengers, the deer.
57	大正 14	1925	花袋行脚 ： 史蹟名勝	田山花袋	大日本雄弁会	【奈良公園】　・・今ではしかし明るい藝術的な公園になつてゐる。鹿がのそのそ歩いてゐる。團隊のおのぼりさんが頻りにそれにパンなどやつてゐる。
58	昭和 2	1927	大和乃栞	水木要太郎	玉井久次郎	【神鹿】　神鹿は鹿島の神の御供して，常陸から移つて来たのが繁殖したのであると言い傳へて，古来これを愛護したもので，鎌倉時代の禁制にも，神鹿を殺害したものは死刑に處するといふ條目もあつた。石子詰の傳説などもその爲に生じた。「子に臥して鹿におこされ奈良の宿」といふも門に死鹿のあるを恐れるからである，一時その數減少せんとする傾きがあつたが保護を加へた結果，今では七八百頭も居るであらう。秋季角伐の行事があるが人を害する恐れがあるからである。昔は町々にて代る代る行うたが今は春日の境内で行ふ。又春日に依頼すれば公會堂あたりで鹿寄せといふことが出来る。鹿の飼養係が喇叭を吹くと，數百頭忽ちに走つて集つて来る。一寸珍しい見物である。
59	昭和 3	1928	旅程と費用概算	ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ﾂｰﾘｽﾄ・ﾋﾞｭｰﾛｰ		【奈良公園】　秋ノ紅葉ハ鹿ト和シ、雪ノ公園ハ他ニ見ル事ノ出来ヌ絶景ヲナシ 【猿沢の池】　之カラ先ガ公園地帯デ、神鹿ハ此ノ邊迄出テ遊客ニ戯レテ居ル。 【春日神社】　春日ノ神鹿ハ頭數七百ニ餘リ、一千二百年カラノ系統ヲ引イテヨク人ニ馴レ、三々伍々群ヲ爲シテ遊覧客ノ袂ヲヒイテ食ヲ乞フテ居ル様ハ洵ニ愛ラシイモノデアル。

60	昭和３	1928	大和めぐり	大阪鐵道局		【猿澤の池】　・・又陸上では神鹿が三々五々首打ち振りやさしい瞳を輝かして餌を乞ふ様も可愛らしい。 【十三鐘】　・・石子詰の趾として名高い。昔十三になる稚子が過つて春日の神鹿を殺して石子詰の死刑に處せられたと云ふ『妹背山』の三作は此傳説から生まれたものである。 【神鹿飼養場】　春日境内のみならず公園到る處に悠々としてやさしい姿を見せて居る無數の鹿の寝所である。奈良の鹿はその系統が千二百年前の昔より連綿として居る點に於て，又人なつかしく餌を乞ふ愛らしさに於て實に世界第一の稱がある。鹿の數と燈籠の數はわからないものとしてあるが約一千頭と稱して居る。最近繁殖殊に多いものか此寝所狹隘を告げ，雪消澤の向側に臨時の寝所を作つて居る。夕方番人が喇叭を吹くと長蛇の列をなしてゾロゾロ集まつて来て柵の中に入るのは一奇観だ。此東に鹿の角伐り場があるが先年から此神事はやらぬ事になつた。 【春日本社】　・・元明帝の和銅二年藤原不比等常陸鹿島明神を勧請した時，白鹿に御して茲に垂迹されたのが春日大明神で藤原氏の尊崇篤く行幸啓の例も非常に多い。　鹿島より鹿（かじき）に乗りて春日なる　三笠の山にうき雲の宮（春雨抄）
61	昭和４	1929	神まうで　23 版	鉄道省	博文館	【春日神社】　・・春日野には博物館や商品陳列所や公會堂の建物がある。その杉の大木の下の芝生や小流の畔，或は樹陰に或は路傍に，いはゆる春日の神鹿が，三々五々群をなし隊を作つて遊んで居り，人の姿が見えると馴々しく近寄つて，袖を引いては餌を求める。 **鹿の角伐り**　毎年十一月中晴天二日續き位に行はれる。神鹿保護會で行ふもの，飼養場の傍の芝生に竹矢來を結ひ入場料を取つて見せる。鹿は幾頭かを矢來に入れ太鼓の合圖で一頭づつ取押へて鋸で其の角を伐るのである。
62	昭和５	1930	鉄道旅行案内	鉄道省		神鹿は芝生の上或は小流の畔或は路傍に或は樹蔭に三々群れをなし，伍々隊を作つて人の袂をひく。行事「鹿の角切」は十月中旬に行はれる。
63	昭和５	1930	新撰お伊勢まゐり大和めぐり	新井和臣	近畿観光会	奈良の鹿は由緒の古いのと愛敬のあるのとで世界一である。数はハツキリしないが千とも云はれ二千とも唱へられる。公園内到る所に世の移り変りに超越して悠々と遊んでいる。 【鹿よせと角伐り】　奈良の名物鹿よせは神鹿保護會（春日野町電話三八八番）へ，午後八時から午後四時迄の間に申込めば、何日でも応じてくれる。その料金は一回十三円だから団体などの余興に適当であらう。 角伐りは毎年十月上旬二日間に亘つて行ふが観覧料は一等五十銭，二等三十銭，一等には福引景品が出る。之も他では見られぬ奇観。
64	昭和５	1930	奈良名所新案内	坂田静夫	東洋図書	【石子詰の址】　大御堂の左前に在つて、土墳の上に二株の古楓が樹つて居る。昔十三になる稚児が過つて春日の神鹿を殺して、こゝに六つの鐘と七つの鐘とを合圖に石子詰の刑に処せられたとある。 【春日神社】　・・参道附近一帯には神鹿が澤山居つて悠々として遊覧人から鹿せんべいを貰つてゐるさまはとても他ではみられない情景である。 【鹿と燈籠】　・・神鹿は約八百頭で、年々殖えて行く方である。春日境内のみならず公園到る処に悠々と連れ廻つて遊んで居り、人を見ると近寄つて頭を下げて餌を求める。餌は糠煎餅で、所々に売つて居る。神鹿飼養所が設けてあつて晩方になると番人が一定の調子で喇叭を吹く、其の音で鹿どもは四方からゾロ／＼と帰つて来て柵の中に入る。中には全く春日山中に棲んで居る山鹿もあつて、公園の里鹿とは習性も違ひ、人を見ると逃げる。ラッパが鳴つても帰らないで勝手に木の下や芝原で夜を送るのもある。町へもノソ／＼と出て来て、夜などは塵溜めの菜の葉や芋の屑などを猟つて行く。すべて植物性のものならば、葉でも根でも何でも喰ふ、紙でもムシャ／＼と喰ふ、此の広い公園が割合掃除の行届いて居るのは鹿が芝には肥料を與へながら雑草や落葉、紙などを食つて呉れるからである。公園の細い木の幹が、割竹で包んであるのは鹿に害されない為なので、小さな一二尺許の杉や檜の植込を大層な木柵で囲つてあるのも是が為である唯「あせび」（馬酔木、此の地ではパチコと呼ぶ）だけは食はない、毒を知つて食はないのであらう、それだから是が公園に大層茂つてる。犬を見ると逃げ

る、小さな犬ころが五六匹の大鹿を追い立てゝてゐるのを屢々見る。駆ける時には首を挙げて耳を後ろに倒して、白い尾の毛をパツと開いて、四脚を一時に揃へてピヨン/＼と跳ぶ。角は牡ばかりに有るのは無論だが、交尾期の秋になると雌を奪合つて、屢々喧嘩を始める。首をグッと下げて角と角とで暫く押合つて、一しきり揉合つて一休みしては又続けるので中々面白いものである。「妻戀ふ鹿の声」と言ふが、全く交尾期に入つて雌を呼ぶ為に鳴くので、離れて聞くと笛の様で非常に遠く響き渡る。併し平常の温和なのに拘らず、此の鳴く頃になると鹿の気が荒んで、時々人に突掛つて来る、婦人や子供などは殊に侮つてか掛り易い。神鹿保護に付ては、昔は徳川幕府から五百石の朱印が付けてあつたものでは（興福寺朱印が同じく五百石）今は神鹿保護會の設けがある。

鹿の生立ちを言へば、交尾は秋で懐妊は十か月、分娩は翌年の六七月頃であつて公園の木の下や、根株の側で安々と兒を産む。生れた子鹿の高さは一尺五寸以内で、色は美しく斑紋が明に見えてゐる。一か月許は乳、それからそろそろ草を試る。満二歳頃から角が生え始め、其の翌年から追々枝が岐れて来る。生えた角は翌年の秋に落ちて又生え代り生え代りする、鹿の毛色は時節に依つて変る。三月末から所謂「かのこ毛」になり始めて、四月から五月で完全になつて、茶色で光沢よく、斑紋が白く美しい。夏はその儘で秋の九月頃から毛が抜け変つて、穢い薄茶色で艶もなく、紋も穢く、紅葉の頃となると全く枯葉の色になつて冬を越す。紅葉の下に門の美しい鹿を画いた絵は全く間違つて居る。

鹿寄せは県や市で賓客を待遇する時などの余興に公会堂の庭などで行ふ事で、喇叭を吹いて、沢山の鹿を駆集めさせ、賓客の手づから餌を與へさせるのである。

角伐りの神事は、毎年十月の中旬頃晴天の日を選び、神鹿保護会で行ふ。飼養場の一端に角伐場が設置されて、入場料を取つて一般に見せる。鹿は豫め幾頭かを集めて角伐場に入れて置いて、太鼓の合図で一頭づつ取り押へ、鋸で其の角を伐る。闘牛に比すべき余程激しい観物だ。（若草山の麓に其の光景を作つてある店があるから縦覧するが宜しい）是れ一つには此の節の角は人に危険だからの思付である。

65	昭和７	1932	旅程と費用概算	ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ﾂｰﾘｽﾄ・ﾋﾞｭｰﾛｰ		【奈良公園】　秋ノ紅葉ハ鹿ト和シ，雪ノ公園ハ他ニ見ル事ノ出来ヌ絶景ヲナシ 【猿沢の池】　之カラ先ガ公園地帯デ，神鹿ハ此ノ邊迄出テ遊客ニ戯レテ居ル。 【春日神社】　春日ノ神鹿ハ頭數八百ニ餘リ，一千二百年カラノ系統ヲ引イテヨク人ニ馴レ，三々伍々群ヲ爲シテ遊覧客ノ袂ヲヒイテ食ヲ乞フテ居ル様ハ洵ニ愛ラシイモノデアル。
66	昭和８	1933	日本案内記 近畿篇下	鉄道省		【奈良公園】　自然美には植物景もあり，姿優しき神鹿の逍遥せるはこの公園の特色である。 【神鹿】　往古春日明神鹿島から遷座の時，鹿に召されたと傳へ，神鹿の由来は古い，現今鹿の数は約一千頭に上り，毎年六七十頭出生すると云ふ。春日神社参道の南方に，神鹿飼育所を設けてある。鹿は晝間こゝから解放され，公園を悠々逍遥して人に近づき，頗る愛嬌がある。鹿寄せは神鹿保護會が申込に應じてこれを行ひ，吹奏する喇叭の音を聞いて，數多の鹿が驀地に駈け来る有様は實に見ものである。秋の角伐りも世に知られて居る。
67	昭和９	1934	旅程と費用概算	ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ﾂｰﾘｽﾄ・ﾋﾞｭｰﾛｰ		【奈良公園】　秋の紅葉は鹿と和し，雪の公園は他に見る事の出来ぬ絶景をなし 【猿沢池】　神鹿は此の邊迄出て遊覧客に戯れて居る。 【春日神社】　春日の神鹿は頭数約一千に上り，毎年七，八十頭出生すると云ふ。春日神社参道の南方に飼育所があり，晝間は此處から解放されて一千二百年からの系統を引いてよく人に馴れ，三々伍々群れを爲して遊覧客の袂をひいて食を乞ふて居る様は洵に愛らしいものである。鹿寄せは神鹿保護會（春日野町にあり電三八八番）が午前八時から午前四時迄の間申込に應じて之を行ひ，吹奏するラッパの音に數多の鹿が驀地に駈け来る有様は實に見物である。料金一回十三圓。
68	昭和９	1934	ガイド旅子 ： 日本名勝温泉趣味之旅行	中西芳朗	旅子閣	【春日神社】　・・「雪消の澤」，春日大明神が鹿島から，鹿に乗つて，来り給ふた時，鹿の雪をおとし給へる所だと云ふ。・・「二の鳥居」がある，右の方に見へる，石の垣をめぐらす廣場，それは鹿の集合所であり，毎夕吹きならす喇叭のまにまに，多くの鹿が集まつてくる所である。 【十三鐘】　石子詰の古跡。十三の稚兒が，あやまつて神鹿を殺し，石子詰の刑にあつたと云ふ所である。

69	昭和 10	1935	近畿中国四国名勝案内	大阪鉄道局	ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ﾂｰﾘｽﾄ・ﾋﾞｭｰﾛｰ	園内至るところ，姿優しい神鹿の姿を見るのはこゝの特色で春の桜，初夏の藤・新緑、秋紅葉の美等四季を通じ，京都などゝ同じく季節のよさを最も多く感じさせられる。
70	昭和 11	1936	大和伊勢南紀旅の栞	大軌参急旅行会	大軌参急旅行会	【十三鐘と石子詰】　昔十三になる三作といふ稚兒が手習をして居ると，春日の鹿が来て双紙を食うたので，卦算を投げつけると，生憎鼻にあたつて死んでしまつた。それで神鹿を殺した罪軽からずで，石子詰の刑に處せられることになつて，一丈三尺の穴を堀り，死んだ鹿と抱合せにして生埋にされた。刑にあつた時刻は丁度夕の七つと六つの間であつたからここを十三鐘といふのださうだ。三作の母が尋ねて来て，泣く泣く永代の花として紅葉の木を塚に植ゑた。鹿に紅葉の取合せは，これから始ると案内人は實じやかに話し出す。 【春日神社】　・・参道の左右には燈籠が立並んで，名物の鹿が三々五々ゝれだつて遊ぶ様は，奈良にのみ見出される風情である。 【萬葉植物園】　馬止橋から左へ入つた所にあつて白鹿飼養場もある。 【神鹿】　馬止橋から右へ入ると，鐵筋混凝土の柵圍ひした鹿苑がある。神鹿の飼養場で，二千九百三十五坪の廣さを有し，夕方になると，鹿寄せの喇叭が鳴り響いて，三百四百と群がつて諸方からなだれ込んでくる。さうして三百貫の豆腐粕と四百貫の甘藷，三十貫の馬鈴薯とが夜の餌としてバラ撒かれる。朝になつて門が開かれると，三々五々打つれて又出て行く。かうした保護や病鹿の療養は，財團法人春日神社神鹿保護會によつてなされてゐる。奈良名物の鹿寄せは，一回十三圓，社務所内の同所に申込めば行つて貰へるが，喇叭の音に多くの鹿が驀地に駈けて来て並ぶ様は，まことに見もので，團體などの催しには好適である。 　この神鹿の起りは，往古春日明神が鹿島から遷座の時，鹿に召されてみえたからであると傳へられ，代々禁制を出して保護されて来たが，徳川時代には，幕府は五百石の朱印を附して保護に當つたといふ。現在鹿の數は約一千頭を數へるが，秋の交尾期には，妻戀ふ鹿の泣く聲が物哀れに聞えて，毎年六七十頭は出生する。鹿苑の東隣に角伐場があつて，毎年十月中旬前後二日間にわたつて，名物の角伐祭が始る。その頃になると，牡鹿の袋角も伸び尖つて，日々氣が荒くなつてくる。角伐場では，勢子たちが牡鹿を逐うて，だんびといふ網をかぶせて引倒し，角を伐るのである。桟敷では數千の見物人が，手に汗して闘牛でも觀るやうな勇ましさに昂奮する。これのみは他に見られない光景である。 　奈良の鹿は，人懐しく顔を見守つて頭を下げ，餌を待ち設ける様は，誠にいぢらしいもので，旅の人には強く印象づけられるものであるが，角伐りを逃れた鹿は，牝鹿を追うて氣も荒く，尖つた角先でよく人に怪我をさせる。又五月中旬から七月上旬へかけて，子を産んだ鹿は危険であるから氣を注けねばならぬ。公園の樹木などに，割竹や金網の包んであるのは，鹿の害を防ぐためである。 【春日境内竹柏純林（天然記念物）】　・・なんでも食べる鹿もこの竹柏の木のみは食べない
71	昭和 13	1938	大和めぐり（ツーリスト案内叢書第３輯）（訂補再版）	ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ﾂｰﾘｽﾄ・ﾋﾞｭｰﾛｰ		【奈良公園】　また園内至るところ姿優しい神鹿の逍遥せるは此の公園の特長で，四季を通じて観光客・古代美術研究者の来往が頻繁である。 【十三鐘】　菩提院大御堂と云ひ，古く寺僧勤行の合圖に暮れ六つと七つとの間に十三の鐘を撞いたことから石子詰處刑の傳説が生れ，昔十三になる稚兒が過つて春日の神鹿を殺して石子詰の死刑に處せられた所と傳へられ，「妹背山」の三作も此の傳説から生れたのである。 【神鹿と燈籠】　神鹿は春日神社の境内のみならず公園至る處悠々逍遥して人に近づき，頗る愛嬌があり，いろいろの意味に於て世界第一の稱がある。春日四所明神の一座にまします武甕槌命は常陸国鹿島から遷座の時，鹿に召して奈良に入り給ふたと傳へ，神鹿の由来は古いものである。現今鹿の數は約七百又は一千頭と云はれ，春日神社参道の南方に鹿苑（神鹿収容所）を設けて居る。鹿寄せは神鹿保護會が申込に應じ（八時から四時迄）て之を行ひ，吹奏する喇叭の音を聞いて，數多の鹿が驀地に駈け来る有様は實に見物である。料金は一回十三圓。毎年十一月（中旬の日曜・祭日の二日）に古式に倣って行はれる鹿の角伐りも世に知られてゐる年中行事である。春日の神燈は神鹿と同じくその数は判らぬものとされて居るが・・

72	昭和 13	1938	旅程と費用概算	ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ﾂｰﾘｽﾄ・ﾋﾞｭｰﾛｰ		【奈良公園】　秋の紅葉は鹿と和し，雪の公園は他に見る事の出来ぬ絶景をなし 【猿沢池】　神鹿は此の邊迄出て遊覧客に戯れて居る。 【十三鐘】　菩提院大御堂と云ひ，古く寺僧勤行の合圖に暮れ六つと七つとの間に十三の鐘を撞いたことから石子詰處刑の傳説が生れ，昔十三になる稚兒が過つて春日の神鹿を殺して石子詰の死刑に處せられた所と傳へられ，「妹背山」の三作も此の傳説から生れたのである。 【神鹿と燈籠】　神鹿は春日神社の境内のみならず公園至る處悠々逍遥して人に近づき，頗る愛嬌がある。春日四所明神の一座にまします武甕槌命は常陸国鹿島から遷座の時，鹿に召して奈良に入り給ふたと傳へ，神鹿の由来は古いものである。現今鹿の數は約一千頭と云はれ，春日神社参道の南方に神苑（神鹿収容所）を設けて居る。鹿寄せは神鹿保護會が申込に應じ（八時から四時迄）て之を行ひ，吹奏する喇叭の音を聞いて，數多の鹿が驀地に駈け来る有様は實に見物である。料金は一回十三圓。毎年十一月（中旬の日曜・祭日の二日）に古式に倣って行はれる鹿の角伐りも世に知られてゐる年中行事である。
73	昭和 13	1938	観光ガイド ： 名古屋・岐阜・三重・奈良	大阪毎日新聞社名古屋総局 編	大阪毎日新聞社	【奈良公園】　・・老杉の大自然美に酔ひ悠々と群れ遊ぶ神鹿に戯れながら散策すれば・・・ 公園の點景名物の鹿は春日の祭神武甕槌命が鹿島からお移りになつた時御召連れになつたと傳へられ春日神社の神鹿として保護をうけてゐる。人懐つこく愛らしいが出産の夏と交尾の秋は一寸生理的関係から子を思ふ親心で思ひがけなく飛出してびつくりさせることがある
74	昭和 14	1939	旅の讀本 ： 大和	奈良縣教育會編	駸々堂書店	

【傳説「鹿を殺して石子詰」】　昔，この菩提院に十三になる三作と申す小僧がございました。三作がお経の學問をして居りましたところ，お春日さんの鹿が来ました。鹿は紙がすきでございますから，お経の紙をくはへました。三作が怒つて筆洗を投げましたところ，これが中り所が悪くて鹿が死にました。奉行が申されるのに，「子供は可哀相であるが助けるわけにはゆかぬ。」とて，鹿を殺したので石子詰にされました。三作にみやといふお母さんがございます。三作の命日には赤い花を手向けるが，死んだ鹿には紅葉をと言つて二本の楓を植えました。これが因で「鹿に紅葉」と申します。ー案内人の「速記録」よりー

【神鹿の話】　神鹿は、春日大社の祭神、武甕槌命が鹿島からお移りの時にお召連になったと言ひ傳へます。

・鹿の数―約千頭

・鹿寄せ―十月五日より十一月二十日まで毎日午後三時。

・鹿の角伐り―十月十六、七日。

・神鹿飼育場（鹿苑）―春日大社参道の東側。

・鹿に注意―鹿にいたづらせぬこと。特に鹿の赤ちゃんをつれた牝鹿に注意。

(國語読本巻十二第十六奈良「人なつかしげに寄り来る鹿の、春はわけてもやさしく、秋より冬にかけて哀音しきりに人の眠をさますも、奈良には缺くべからざる風情なるべし。)

【奈良公園】　緑の芝生，大小とりどりの樹々，そしてその間に陰見する山々，建物，人なつかしい鹿の群，なだらかな丘

【御料地】　御料地は，道をへだてて浅茅ヶ原の東にあります。・・この邊で，數百頭の神鹿がラツパの音につれて集る，珍しい鹿寄せが行はれます。

75	昭和 15	1940	改版 日本案内記	鉄道省		【神鹿】　往古春日明神鹿島から遷座の時、鹿に召されたと傳へ、神鹿の由来は古い。現今鹿の数は約一千頭に上り、毎年六七十頭出生すると云ふ。春日神社参道の南方に、神鹿飼育所を設けてある。鹿は晝間こゝから解放され、公園を悠々逍遥して人に近づき、頗る愛嬌がある。鹿寄せは神鹿保護會（または奈良市役所観光課）が申込に應じてこれを行ひ、吹奏する喇叭の音を聞いて、數多の鹿が驀地に駈け来る有様は實に見ものである。秋の角伐りも世に知られて居る。

76	昭和 15	1940	聖地橿原 ： 附大和の名勝	聖徳修道会	泉書房	【奈良公園】　・・四季折々の美しき大自然に配するに千年の歴史を誇る遺蹟，人に馴れて三々五々と遊ぶ神鹿を以てし，自然と人工との見事な融和をみせてゐる。 【大御堂】　・・境内に石子詰處刑の傳説を持つ礫塚がある
77	昭和 15	1940	旅の読本・畝傍と飛鳥	奈良縣郷土顯彰會	駸々堂書店	【興福寺】　『鹿を殺して石子詰』の伝説で知られています
78	昭和 17	1942	奈良案内記	永島福太郎	奈良市観光協会	【はしがき】　奈良は大佛さんや鹿で有名ですが，此の大佛さんや鹿はただ見物人に見せる見せ物としてあるのではありません。大佛さんといひ，鹿といひ，夫々尊い歴史を持つて居ります。 【春日神社】　神鹿　奈良には鹿が澤山飼はれて居りますが，此の鹿は春日神社の神鹿といはれて昔から大切に保護せられて居ります。春日の神様が奈良にお出でになる時に，白鹿に乗つていらしやつたとの言ひ傳へによつて，厚く保護せられて居るのです。 十三鐘　・・此處は三作石子詰の地といふ事になつて居ります。昔三作といふ少年が，過つて神鹿を殺した為に，石子詰といふ刑に處せられたといふ傳説があるのです。これは神鹿を殺したものは，死刑にされたといふ事實を傳へた一つのお話で，それ程に鹿は大切にされてゐたのです。
79	昭和 17	1942	奈良の史蹟	山村素一	奈良県聖地顕揚課／奈良県観光連合会	【序詞】（奈良県警察署長）　・・春日様の鹿は只の野獣ではない，御鎮座の際，鹿嶋神宮の御神霊を白鹿の背に奉じて奈良へ御奉遷したと傳へられ，其れ以来神様の召使として，永年に亘つて神鹿として保育されて居る。この鹿の源を尋ぬれば鹿嶋神宮より神代に遡り，吾々大和民族と命を同じうする存在とも云へる。 【奈良公園】　・・更に朝春日の神鹿の，棲家を離れて芝生に出て来る有様は，一幅の生きた名畫だ。 【石子詰】　・・昔十三になる稚兒が，間違つて春日の神鹿を殺し，その為，石子詰の刑に處せられた。それ程神鹿は大切に保護しられたといふ一つの傳説であらう。 【神鹿】　約一千頭は居る。その昔，春日の神武甕槌命が鹿島からお移りになつた時，御召連れになつたとも，又，白鹿に乗つて御出になつたとも傳へられる。手厚い保護を受けてゐる。
80	昭和 17	1942	奈良観光読本	北澤善之	奈良市観光協会	【神鹿】　奈良にゆかりの深い鹿は本社の神鹿である。祭神が白鹿に召されて鹿島から御上洛せられたといふ故事から，古来神使として厚く保護せられて来たのである。今ではその數實に千に餘り，或は浅茅ヶ原のなだらかに群れ，或は古塔のほとりに遊ぶも，夜となれば春日參道の傍の「鹿苑」に収容されてねむる。この「鹿苑」と參道をはさんで本社附属の萬葉植物園　萬葉集に見ゆる植物を植栽して一般の研究に供している　があり，その中には御下賜の白鹿が保育されてゐる。 【神鹿塚】　興福寺菩提院大御堂　俗に十三鐘といふ　境内には神鹿に因む「三作石子詰」の哀話が残り，更にその傍に「神鹿塚」があつて神鹿の靈を懇ろに弔つてゐる。 （年中行事）【神鹿角伐】　十月中旬　奈良の鹿は神鹿と云つて優しい動物であるが，秋の交尾期になると氣が荒くなつて，角を刀として眞剣勝負を開始するし，人にも突きかかつてくる。こうした危険を防止する爲に角を伐つたのが起りで，約二百年位前から始まつたらしい。最初は奈良奉行の監督下に各町々で行つたものであるが，明治以後は神鹿保護會の主催で，一ヶ所に集めて行ふことになつた。 （観光に伴ふ料金）【鹿寄せ】　春日神社内春日神鹿保護会一回十三圓
81	昭和 17	1942	大和史蹟案内	奈良県	奈良県	【春日神社】　・・武甕槌命は常陸の鹿島を進發，白鹿に駕し，柿の木を御杖として神幸・・ 【神鹿】　當社に於て鹿を神の使いとして崇めるに到つた理由は詳かでないが，武甕槌命鹿島から影向の際に白

						鹿に乗つて移御せられてと傳ふる事に基くものと云ふ。しかし鹿が神の使いとして神格を持つに至つたのは平安朝末葉頃からであるらしい。鎌倉以降幕府によつて捕獲，危害を禁ぜられて来た事は人の知るところであらう。現在約一千頭の神鹿が神鹿保護會によつて保護せられ，古都の情景を彩つてゐる。

『大和名所図会』（1790）の挿絵では猿沢池の絵はないが，春日担茶屋で旅人が円板状の食べ物を鹿に投げており，人と鹿の関係をうかがわせる。近世の奈良の鹿についての来訪者の印象は，案内記類での記述より，案内記類の挿図や絵図類での描かれ方に左右された部分があった考えられる。この点については，案内記類の挿絵だけでなく絵図も含め稿を改めて検討することとし，以降の章では明治期以降の奈良の鹿に関する案内記類での鹿に関する記述内容について検討する。

４　明治期以降の奈良の案内記類における奈良の鹿

（１）第二次大戦前までの案内期類の概観

明治期以降，第二次大戦前までの間に発行された奈良に関する案内記類を，奈良県立図書情報館及び国立国会図書館所蔵のものを中心に収集し，表３にまとめた。鹿に関する記述がないものも一部含めている。何版も発行されているものについては，内容が確認でき，鹿に関する記述内容に違いがみられた版について表に含めている。すべての版の確認はできていないが，記述内容の変化の傾向を確認することは可能である。

明治期以降，第二次世界大戦前における国内の旅行案内書については，近代日本の旅行案内書を概観した荒山（2018）を参考に分類することができ，

表４　明治期以降第二次世界大戦前までの案内記類の分類
（荒山（2018）をもとに筆者作成）

分　　類	発行時期
①近世の名所図会や道中記を継承したもの	明治20年代まで
②初期の鉄道旅行案内書	明治20～30年代
③鉄道院と鉄道省による旅行案内書	明治40年代以降
④鉄道管理局と鉄道局による旅行案内書	明治40年代以降
⑤ジャパン・ツーリスト・ビューローの旅行案内書	大正期以降
⑥①～⑤に含まれない全国的な旅行案内書	明治期以降
⑦①～⑤に含まれない各地の旅行案内書	明治期以降

それぞれの発行時期とともに表４に整理した。荒山は⑥，⑦については，大正から第二次大戦前のものを分類していたが，ここでは，明治期以降第二次大戦前までの案内記類としている。また，奈良を対象としたものから近畿圏を対象とした案内記類について⑦に分類した。

表3の案内記類について，この7分類により発刊年ごとに図1に整理した。第二次大戦前までの奈良に関し記述した案内記類については，発刊数と発刊者から大きく3つの時期に区分することが可能である。まず，第１期として1889（明治22）年から1906（明治39）年まで，明治20～30年代が特徴的な時期として区分できる。分類⑦の奈良や近畿を対象とした案内記類と，分類②の初期の鉄道旅行案内が多くみられる時期である。第２期としては1909（明治42）年から1925（大正14）年までの③鉄道院・鉄道省による案内記類が多くみられる時期が区分できる。第３期としては，1928（昭和3）年以降の⑤ジャパン・ツーリスト・ビューローが発刊する案内記類が多くみられる時期である。第２期，第３期の期間中は，⑥の全国的な案内記類，⑦の奈良や近畿を対象とした案内記類も継続的に発刊され，鉄道院・鉄道省やジャパン・ツーリスト・ビューロー発刊のものを中心に多様な案内記類が発刊された時期といえよう。

（2）第１期の案内期類の特徴

1889（明治22）年から1906（明治39）年までの第1期で特徴的な事項は，33を数える案内記類のうち22までが⑦に分類され，奈良町あるいは奈良県に特化したものだという点である。明治期の奈良の案内記類について検討した森下（2017）は，1890（明治23）年の大阪鉄道開通[1]にともない，1890（明治23）年から1892（明治25）年にかけて，橋本町の阪田講文堂（阪田一郎）による地図，名所絵図，名所案内記の出版によって明治期の新しい観光出版物が確立したとする。この時期に，金沢昇平の『平城坊目遺考』（1890），『大和名所巡覧記』『奈良名所袖鑑』（1891），鳥居武平による『奈良名所案内詞』（1892）が阪田講文堂から発行され，第１期のはじめに発行された案内期類のほとんどを阪田講文堂のものが占めている。

その後，1895（明治28）年に多数の案内期類が刊行されているが，このうち『大和名処　ならのしるべ』，『袖珍奈良のしるべ』，『奈良の名所』の３点は奈良県尋常中学校（郡山中学）教諭であった水木要太郎により記されている。森下（2017）は，水木の案内書は同年３月の帝国奈良博物館の開館を契機として書かれた点を指摘し，一方，丸山（2009）は同年４月から京都岡崎で開催された第四回内国勧業博覧会や平安遷都千百年紀念祭の開催を機に観光客誘致を目的とした案内書の出版が進められた点を指摘している。『京都名勝案内記附聯合府縣』（1895）は，岡崎での博覧会，祈念祭の紹介とともに，京都府以外に奈良も含めた1府9県の名勝を紹介している例をみると，博覧会に関連して奈良を紹介する動きはみられた。

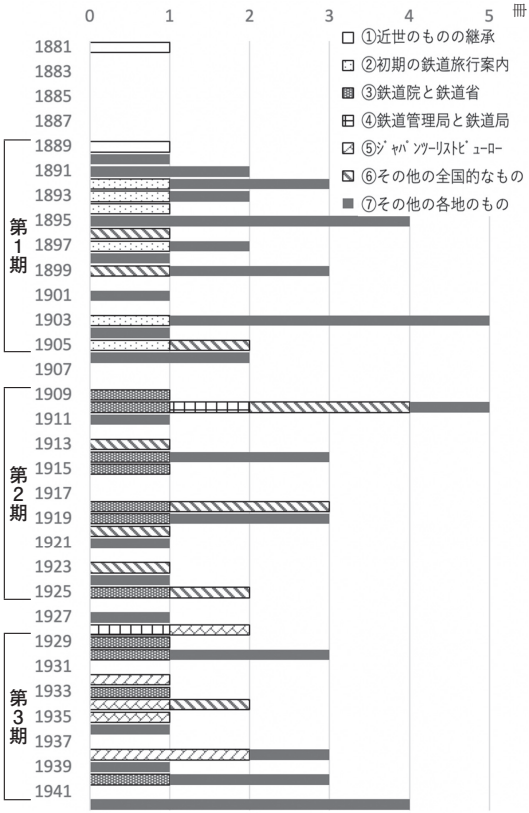

図１　明治期以降の案内記類の発刊時期と分類

この第１期の期間には，1897（明治30）年に古社寺保存法が制定され，国宝，特別保護建造物制度によって奈良の古美術，古建築が多く指定されている。このことが，奈良の歴史的価値，美術的価値についての認識を高める要因になり，近世的な社寺参詣に加え博物館見学など歴史的価値，美術的価値をもとにした案内記類が見られ始めた時期であった。1892年に『奈良名所案

内詞』を記した鳥居武平は，帝国博物館陳列事務嘱託であったが1898（明治31）年に『美術淵源　大和周遊誌』を記し，名所案内から古美術古建築を中心とした案内へと重点を移している。そして第１期の終期頃，1903（明治36）年に大阪・天王寺で行われた第五回内国勧業博覧会に合わせた多くの案内記類がみられる。水木要太郎による『大和巡』，漢文体の『大和引路誌要』と英文の“A guide to Yamato”が博覧会奈良県協賛会によって発刊されている。

案内記類での鹿に関する記述内容を人との関係，行事，保護管理などに類型化し表5にまとめた。第１期の案内記類での鹿に関する記述をみると，鹿が人馴れしている，餌を求めるといった人との関わりに関する記述は，奈良を紹介する地元出版の案内記類でも初期の頃はほとんどみられない。全国を対象とした案内記類もみられるが，奈良の扱いは大きくなく，鹿に関する記述はほぼみられない。その中で当時，国内最大の出版社であった博文館の大橋又太郎（乙羽）は，1899（明治32）年の『千山萬水』で各地を紀行文で紹介している。「奈良の古都」の紹介中，「一の鳥居を行けば無數の鹿ども右に左に纏綿ひて馴れ睦む様の愛らしさ，一同興がりて糠煎餅に財布の底をはたき」と，人と鹿の関わりを実態に即して記している。『千山萬水』は博文館の持つ流通網によって全国で販売され，明治40年代に至るまで20版以上は増刷され，広く流布された。近世の紀行文でも，1838（天保９）年の『大和巡日記』（安田相郎）では，「鹿往来人の袖たもとにもつるる。鹿にあたゆるくたもの賣有。求て手にのせさし出せは，鹿くろう事誠に人馴たる證也。」など，人馴れし餌を与えられる鹿は描かれていた（その他の事例も含め，水谷・平（2018）にまとめている）。しかし，人馴れした鹿が餌を求める奈良の鹿の様子が大量に流通した出版物を通して広く知られる機会は，大橋と博文館によって生じたと考えられる。

（３）第２期の案内記類

第２期は1909（明治42）年から1925（大正14）年まで，ほぼ大正期であり，③鉄道院・鉄道省による案内記類が多くみられる時期である。鉄道院・鉄道省による官製の鉄道線沿線の名所紹介が当初『鉄道院線沿道　遊覧地案内』，

その後『鉄道旅行案内』とタイトルを変え，また，判型も様々に変えて毎年のように発刊されている。民間の案内記類も，全国を対象としたもの，奈良を対象としたものが断続的に発刊されている。「人馴れ」，「食を乞う」といった簡単な表現である場合も多いが，すべての案内記類で，ほぼ鹿と人との関わりについて触れられている。官製のものでは“An Official Guide to Eastern Asia Vol.2”（1919）に鹿に与える餌の内容や買える場所まで記している点が特徴的である。奈良県による『大和名所案内』（1919）がこの時期の案内記類としては最も詳細で，鹿に関する記述量も多い。

（4）第３期の案内記類

第３期として，⑤ジャパン・ツーリスト・ビューローが発刊する案内記類が多くを占めるようになった1928（昭和3）年以降の時期を区分できる。ジャパン・ツーリスト・ビューローは，1928年以降，『旅程と費用概算』を毎年のように発刊し，これは第二次大戦後も『旅程と費用概算』として継続的に刊行されている。『旅程と費用概算』は，発刊当初は東京などを起点とした旅程案，日程案と費用の概算を示した小冊子であったが，1928（昭和3）年頃から旅程にある観光資源の紹介が加えられ，毎年のようにページ数を増やし，案内記としての役割を果たしていく。1935（昭和10）年頃からは観光資源の紹介部分を地域別に分離させた「ツーリスト案内叢書」シリーズを発刊し，奈良については，1936（昭和11）年に『大和めぐり』が発刊されている（今回確認できたのは1938（昭和13）年版以降である）。『旅程と費用概算』のページ数が増え，さらに『大和めぐり』として分離するにつれ，鹿についての記述量は増え，『大和めぐり』では，多岐にわたる記述内容となっている。

第２期に発刊が多かった官製の案内記類は，この第３期には，1933（昭和8）年に『日本案内記　近畿編下』が発刊されている。『日本案内記』は鉄道省の案内記類の中で学問的水準に立脚し最高の出来栄えを示したとして評価が高い（中川（1979））。日本交通公社（1962）によれば，これは種田虎雄によって編纂が計画され，1926（大正15）年に事業を立案，1927（昭和2）年に編纂に着手し，1929（昭和4）年の東北編を皮切りに1933（昭和8）年には近畿編

表5　明治期以降，第二次大戦前の奈良に関する案内記類での鹿に関する記述の類型

番号	発刊年／西暦	タイトル	表4の分類	鹿と人との関係				鹿関係行事		鹿の状態		鹿の位置付け		鹿の保護管理			伝説		歴史
				人馴れ	餌を求める	与える餌の内容	餌売り場	角伐り	鹿寄せ	頭数	鹿の生態	神鹿	春日野の鹿	飼養場／含呼寄	神鹿保護会	農業被害／食害	武甕槌命と鹿	石子詰	近世の鹿管理
1	1881	奈良名所一覧	①																
2	1889	内國旅行 日本名所圖繪	①											○					
3	1890	平城坊目遺考 上，付録	⑦					○									○		
4	1891	大和名所巡覧記	⑦									○							
5	1891	奈良名所袖鑑	⑦	○	○														
6	1892	大和巡り四日の旅行	⑦	○	○														
7	1892	奈良名所案内詞	⑦					○									○	○	○
8	1892	全国鉄道名所案内	②																
9	1893	改正画入奈良名所記	⑦														○	○	
10	1893	日本名勝地誌.第壹編	②										○						
11	1894	全国鉄道賃金名所旧跡案内	②					△（春季と記載）				○							
12	1895	京都名勝案内記	⑦					△				○							
13	1895	奈良のしるべ	⑦					○				○		○			○		○
14	1895	袖珍奈良のしるべ	⑦																
15	1895	奈良の名所	⑦									○					○	○	○
16	1895	全国鉄道名所案内	②																
17	1897	奈良名勝順路案内	⑦														○	○	
18	1897	東海東山畿内山陽漫遊案内	②	○															
19	1898	大和周遊誌 美術淵源，上編	⑦	○								○	○						
20	1899	千山萬水	②	○	○	糠煎餅								○					
21	1899	奈良繁昌記	⑦	○	○	餌						○		○				○	
22	1899	奈良名勝便覧	⑦															○	
23	1901	吉野名勝誌 附大和名所	⑦															○	
24	1903	大和名勝（日本名勝第一集大和國）	⑦	○	○	（鹿の）食物	休憩店	○				○						○	
25	1903	大和巡	⑦									○							
26	1903	大和引路誌要／A guide to Yamato	⑦	○						numerous									
27	1903	奈良名勝誌 附大和名勝	⑦									○						○	
28	1903	日本海陸漫遊の栞 西部	②										○						
29	1904	奈良名所案内圖繪	⑦	○	○					数百		○							
30	1905	日本漫遊案内 下巻	②					△		数百頭		○		○					
31	1905	大日本地誌　巻四近畿	⑥	○				△				○							○
32	1906	英和奈良問答	⑦	○													○		

33	1906	奈良名勝記	⑦															○	
34	1909	鉄道院線沿道 遊覧地案内	③	○															
35	1910	鉄道院線沿道 遊覧地案内	③		○			△				○							
36	1910	西部鉄道管理局線 名勝遊覧案内	④	○				○		数百頭		○					○		
37	1910	新撰名勝地誌. 巻1　畿内之部	⑥	○				△				○							○
38	1910	大和大観	⑦									○	○	○			○	○	
39	1910	七日の旅 : 漫遊案内	⑥	○						数百		○							
40	1911	奈良名勝案内枝折	⑦																
41	1913	帝国漫遊案内	⑥		○			△				○							
42	1914	大阪より奈良まで 沿道名所案内	⑦	○	○			△											
43	1914	大和名所案内	⑦	○	○	糠煎餅 とキラズ団子	所々に 売って いる	○	○ 賓客 向け	600頭, 年々増加	○	○		○	○	○		○	
44	1914	An Official Guide to Eastern Asia Vol.2	③	○	○	buiscuits	Hotel, procured in the park	○		700頭		○					○		○
45	1915	鉄道旅行案内	③		○			○				○							
46	1918	日本の名勝，科外教育 叢書 ; 第40	⑥		○							○	○						
47	1918	大日本名勝史蹟	⑥					△		数百頭		○							
48	1918	汽車の窓から　本編	⑥	○	○	糠煎餅 とキラズ団子	所々に 売る店 がある					○						○	
49	1919	奈良名所案内	⑦	○	○			○	○ 賓客 待遇	800頭位, 年々増加	○	○		○	○	○		○	
50	1919	ならゆき大軌電車沿線 名所案内	⑦	○	○			○		1000頭, 年々増加									
51	1919	神まうで(初版)	③	○	○							○							
52	1920	史蹟名勝天然記念物. 前編	⑥	○								○							
53	1921	近畿遊覧 一日がけと泊りがけ	⑦									○						○	
54	1923	新撰鉄道旅行案内	⑥									○							
55	1924	近畿遊覧その日帰り	⑦	○	○	糠煎餅		△				○						○	
56	1925	An official guide to Nara=英文奈良案内記	⑦	○						700頭				○					
57	1925	花袋行脚 : 史蹟名勝	⑥		○	パン など													
58	1927	大和乃栞	⑦					○	○	7-800頭		○					○	○	○
59	1928	旅程と費用概算	⑤	○	○					700余		○							
60	1928	大和めぐり	④		○			○	○	1000頭		○		○			○	○	
61	1929	神まうで(23版)	③	○	○			○				○		○					
62	1930	鉄道旅行案内	③	○				○				○							
63	1930	新撰お伊勢まゐり大和 めぐり	⑦					○ 一等 50銭	○ 13円	千とも 二千とも					○				
64	1930	奈良名所新案内	⑦		○	鹿せん べい, 糠煎餅	所々に 売る	○	○ 賓客 接遇	800頭 年々ふえる	○	○		○	○	○		○	
65	1932	旅程と費用概算	⑤	○	○					800頭余		○							

66	1933	日本案内記 近畿篇下	③	○				○	○	1000頭,毎年60－70頭出生		○		○			○		
67	1934	旅程と費用概算	⑤	○	○				○ 13円	1000頭,毎年70－80頭出生		○		○					
68	1934	ガイド旅子：日本名勝温泉趣味之旅行	⑥						○					○			○	○	
69	1935	近畿中国四国名勝案内	④									○							
70	1936	大和伊勢南紀旅の栞	⑦	○	○			○	○	1000頭,毎年60－70頭出生	○	○		○	○	○	○	○	○
71	1938	大和めぐり(ツーリスト案内叢書第3輯)訂補再版	⑤	○				○	○ 13円	七百又は千頭		○		○	○		○	○	
72	1938	旅程と費用概算	⑤	○				○	○ 13円	1000頭		○		○	○		○	○	
73	1938	観光ガイド：名古屋・岐阜・三重・奈良	⑦	○							○	○					○		
74	1939	旅の讀本：大和	⑦	○				○	○	1000頭	○	○		○			○	○	
75	1940	改版 日本案内記	③	○				○	○	1000頭,毎年60－70頭出生		○		○	○		○		
76	1940	聖地橿原：附大和の名勝	⑦	○								○						○	
77	1940	旅の読本・畝傍と飛鳥	⑦															○	
78	1942	奈良案内記	⑦									○					○	○	
79	1942	奈良の史蹟	⑦							一千頭		○					○	○	
80	1942	奈良観光読本	⑦					○	○ 13円	千に餘		○			○		○	○	
81	1942	大和史蹟案内	⑦							一千頭		○			○		○		○

下が発刊されている。それまでの鉄道省の『鉄道旅行案内』とは情報の量と質が格段にあがっており，奈良の鹿に関する記述も詳細になっている。ジャパン・ツーリスト・ビューローの案内記類，鉄道省の案内記類ともに情報量を増やす方向で改訂を続けた時期といえる。

奈良を対象とした案内記類をみると，第2期にみられた奈良県による『大和名所案内』が『奈良名所新案内』（1935）に改訂された他，大軌参急旅行会による『大和伊勢南紀旅の栞』（1936）に詳細な記述が見られる。これは大阪電気軌道によって編纂されているが，『日本案内記』を企画した鉄道省の種田が1927（昭和2）年に大阪電気軌道の専務取締役として入社後，同社に大和文化の編纂室をもつようになり，詳細な奈良の案内書である『大和路』叢書十三冊を刊行した（鶴見（1958））。『大和伊勢南紀旅の栞』も同趣旨によって詳細な案内書として編纂されたものと考えられる。

このような詳細な案内記類により，奈良の鹿については，人との関係（人に馴れ，餌を求める），角伐行事，鹿寄せ行事，鹿の数，神鹿飼養場，伝説（武甕槌命と鹿，石子詰）といった多面的な紹介がなされるようになる。鉄道省，ジャパン・ツーリスト・ビューローが全国で販売する案内記類への情報の掲載により，奈良の鹿の情報は浸透していったと考えられる。

5　各期を通じての奈良の鹿の記述の傾向

前章で各期の鹿に関する記述について若干検討したが，各期を通じてみられる鹿に関する記述を表５で概観し，明治期以降，第二次大戦前までの案内期類での鹿の記述の傾向を整理する。

（1）鹿と人との関係

人馴れしている，餌を求めるという記述は，前述のとおり第１期の明治30年代から見られ，その後，第二次大戦前まで，大半の案内記類に記されている。1942（昭和17）年の4点で記述がみられないが，偶然ではなく鹿の神使としての位置付けが強調された記述が見られることともあわせ，戦時下の時局がもたらした変化と考えられる。

（2）鹿関係行事

角伐りについては，81の案内記類のうち34でとりあげられている。しかし，表４で②に分類される初期の鉄道旅行案内である『全国鉄道賃金名所旧跡案内』（林荘太郎：1894）で，「毎年三月九日十日神鹿角切り祭を執行し」と，秋に行われる角伐りが春に行われるとする記述がみられる。この案内書は全国をカバーする鉄道旅行案内書として最も初期のものとされ，この案内書の形式が明治40年代に鉄道院から出版される鉄道旅行案内書へとつながったとされる（荒山 2018）。この後の鉄道旅行案内は，この記述を参考にしたのか，坪谷善四郎の『日本漫遊案内』（1905）では「毎年春季彼岸鹿の角伐を行ひ公衆の観覧に供す」，さらには鉄道院による『鉄道院線沿道 遊覧地案内』（1910）でも「春季彼岸に行ふ鹿の角切，また一奇観と稱せらる」とし，③に分類される鉄道院の案内記類でも，1914年の“An Official Guide to Eastern Asia Vol.2”で10月中旬と記されるまで誤りは続いている。地誌類でも山崎直方編の『大日本地誌』（1905）で「春季彼岸を時とし，有名なる鹿の角切を行ひ，公衆の観覧を許すを以て」とし，全国的な旅行案内書として田山花袋の『新撰名勝地誌. 巻１　畿内之部』（1910）も「春季彼岸を時として，有名なる鹿の角切を行ひ，公衆の縦覧を許すを以て，遠近来り見るもの甚だ多しといふ」と記し，実に1924（大正13）年の『近畿遊覧その日帰り』まで角伐りは春季と紹介する案内記類がみられる。

奈良で出版された案内記類では，角伐りを春とする間違いはないが，上記の誤りの継続からみると，全国を対象とする鉄道旅行案内書や地誌類では，奈良で出版された文献を参考とせず，既に発行されている全国を対象とする案内記類を参考に編集したと推測される。

興福寺の五重塔，東金堂，北円堂，南円堂，三重塔などの建造物の再建年の記述の違いから，明治期から第二次大戦後までの奈良の案内記類の相互参照関係をみた和泉（2021）は，多くの案内記類が既存のものを参考に記されており，金沢昇平『平城坊目遺考』（1890），水木要太郎『大和巡』（1903），鉄道省『日本案内記』（1933），大軌参急旅行会『大和伊勢南紀旅の栞』（1936）の４点が，他の案内記類の記述の参考とされたと整理している。また，水木

（1903）以外の金沢（1890），鉄道省（1933），大軌参急旅行会（1936）は，以前の案内記類だけでなく他の資料にあたり記述内容を精査し，その時点の記述内容としては正確性が高かったこと，一方で水木（1903）以降は長期間にわたりそれを参考に記述されたものが多いことが確認されている。このような案内記類の作成方法を考えると，水木（1903）において鹿に関する記述が極めて少ないことから参考とならず，全国を対象とした他の案内記類を参考に記述した結果，誤りが繰り返されたものであろう。

（3）鹿の状態

鹿の頭数について言及する案内記類が明治30年代後半から見られる。数百から600頭，700頭と数値は増え，1000頭程度とする案内記類もみられる。奈良の鹿の生物学的な記述としてまとまったものは，1920（大正９）年に春日神鹿保護会から出版された動物学者の八田三郎による『奈良と鹿』が初めてと見られる。八田は頭数を「七百頭許」，子の数を「一ヶ年凡六七十頭」としている。最初に600頭と具体的な数に言及した奈良県の『大和名所案内』（1914）以降，奈良県が出版に関係する案内記類には頭数が記述されている。“An official guide to Nara”（奈良県：1925）では700頭，『奈良名所新案内』（坂田静雄奈良県公園課長：1930）では800頭，『旅の読本：大和』（奈良県教育会：1939）では1000頭と徐々に記載される数は増加しているが，何を根拠として記載内容を変化させたのかは不明である。

奈良県関係の案内記類には毎年の増加数はふれられておらず，60～70頭増加という八田の『奈良の鹿』での記載と同じ数字は『日本案内記』（鉄道省：1933），『大和伊勢南紀旅の栞』（大軌大軌参急旅行会：1936）にみられる。角伐りの箇所でふれたが，『日本案内記』（鉄道省：1933）と『大和伊勢南紀旅の栞』（大軌大軌参急旅行会：1936）は，既存の案内記類の記述だけでなく関係する資料を広く集め，案内書を編集したものであり，八田の資料も参考に増加数を記したと考えられる。しかし全体の頭数はいずれも1000頭とし，八田の700頭とは違う数値としている。記述内容に慎重を期する『日本案内記』が何を根拠に1000頭としたのかは不明であるが，大正から昭和期に鹿の

生息数が実際に増加傾向であったのかも含め検証する必要がある。

（4）鹿の位置付け

「神鹿」とする表現は，各時期を通じ，多くの案内記類でみられる。「春日野の鹿」という南都八景の景物としての記述はほとんどみられず，近世の案内記類での和歌に詠まれた名所としての「春日野」の紹介は，明治期以降はほとんどなされなくなっている。

（5）鹿の保護管理

鹿苑，神鹿飼養場についての記述の数は多くないが，第1期から第3期まで広くみられ，ラッパによって飼養場所に集める状況が記述されているものもある。神鹿保護会に関する記述は第2期以降に多く見られるが，これは，鹿の保護管理団体の役割の説明というより，鹿寄せや角伐りを実施する団体としての紹介が多くなったためである。

（6）伝説

武甕槌命が鹿に乗って来たとする話よりも稚児が鹿を殺して石子詰にあったことについての記述が多い。石子詰についての記述は第1期から第3期までいずれにもみられる。注目すべき点は，『大和大観』（1910）までの石子詰を記すほとんどの案内記類では，「妄説」，「妄誕」，「俗説」であることを記し，浄瑠璃や落語によって広く知られていた石子詰の説話の場所である菩提院を紹介するとともに，説話自体は実話ではないことを強調している。大正期以降の案内記類では，妄説といった記述はほぼみられなくなり，伝説として整理されたと言えよう。

6　おわりに

本稿では，近世から近代，第二次大戦前までの奈良に関する案内記類を一覧し概観した。近世は東大寺の復興事業にあわせて17世紀末から名所記が様々発刊されたが，その後19世紀には絵図屋庄八による案内記類の改版がみられるのみで新たな案内記類は発刊されない時期を迎えた。明治期には，明治20～30年代に京都，大阪で行われた内国博覧会を契機として奈良を対象とした案内記類が多く発刊された。その後の奈良の案内記類は，官製のもの，ジャパン・ツーリスト・ビューローが発行するものが多くなり，1930年代にはその内容の詳細化が進んだ。

このような案内記類の発刊の流れによって鹿に関する記述も変化をみせる。近世には，武甕槌命との関係と南都八景の春日野の鹿の紹介にとどまっていた鹿に関する記述は，明治30年代から，人と鹿との関係の記述が散見されるようになる。第３期には，案内記類の記述の詳細化とともに鹿に関する記述量も多くなり，角伐や鹿寄せ，鹿の数，飼養場など鹿に関する行事，鹿の状態に関する記述が増加する傾向がみられる。このような記述傾向の変化が何を意味しているのか，奈良の内部の者と外部の者との記述のスタンスの違いなど，鹿に関する記述内容は稿を改めて検討したい。

本研究はJSPS科研費 20K12404の助成を受けたものである。

〈注〉

[1] 大阪鉄道は1890（明治23）年9月までに湊町－亀瀬間が開業，12月に王寺－奈良間が開業した。1892（明治25）年2月には亀瀬隧道が完成し，湊町－奈良間が開通する。

〈文献〉

荒山正彦（2018）『近代日本の旅行案内書図録』創元社

和泉果歩（2021）奈良のガイドブックの作り方―興福寺建造物の再建年に着目して―，奈良県立大学卒業論文（未公刊）

郡千寿子（2013）『南都名所記』についての一考察―山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性―，弘前大学教育学部紀要110，1-8

財団法人日本交通公社（1962）『五十年史 : 1912-1962』交通印刷株式会社
白石克（2005）『ならめいしょえづ（奈良名所絵図）』を読む，帝京史学21，125-159
平侑子・水谷知生（2018）江戸中後期における旅人と奈良の鹿との関係 : 道中日記に見る宗教性と娯楽，動物観研究 : ヒトと動物の関係学会誌（23），3-12
鶴見祐輔（1958）『種田虎雄伝』近畿日本鉄道株式会社
中川浩一（1979）『旅の文化誌―ガイドブックと時刻表と旅行者たち』伝統と現代社
幡鎌一弘（2010）神鹿の誕生から角切へ，奈良の鹿愛護会監修『奈良の鹿 :「鹿の国」の初めての本』京阪奈情報教育出版所収
八田三郎（1920）『奈良と鹿』春日神鹿保護会
平井良朋（1964）近世奈良地誌少考（一）（二）大和文化史研究9-8，9-11
平井良朋（1966）近世奈良地誌少考（三）大和文化史研究11-11
平井良朋（1968）近世奈良地誌少考（四）大和文化史研究13-12
平井良朋（1969）汎大和近世地誌少考（一）（二）大和文化史研究14-6，14-9
古川聡子（2000）近世奈良町の都市経済と東大寺復興，ヒストリア169，51-75
丸山宏（2009）水木要太郎と「名勝案内」，久留島浩ら編『文人世界の光芒と古都奈良―大和の生き字引・水木要太郎―』思文閣出版所収
水谷知生・平侑子（2018）近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性，地域創造学研究29（2），19-51
森下惠介（2017）明治の奈良観光出版物，奈良学研究（19），27-44
山近博義（1995）近世奈良の都市図と案内記類，奈良女子大学地理学研究報告Ⅴ，143-175,